

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I. その人らしい暮らしを支える

(1) ケアマネジメント

(2) 日々の支援

(3) 生活環境づくり

(4) 健康を維持するための支援

II. 家族との支え合い

III. 地域との支え合い

IV. より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 5 月 25 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 16名	(依頼数) 27名
地域アンケート回答数	6名	

※事業所記入

事業所番号	3890600145
事業所名	グループホーム小松の里
(ユニット名)	東通り
記入者(管理者)	
氏名	伊藤元栄(大森晋也)
自己評価作成日	令和 4 年 1 月 31 日

<p>【事業所理念】</p> <p>○入所者一人ひとりが自立した生活を営むことができるよう介護計画を作成し、身体面と心のケアを提供いたします。○一人ひとりが穏やかに、より生き生きと暮らせるよう環境を整え、安全で質の高いサービスが提供できるよう努めます。○主治医、協力病院と連携して、入居者が健康に生活できるよう援助します。○地域の人達と交流を図り、入居者の暮らしが地域社会に開かれたものとなるよう努めます。○市町村、地域の保健・医療・福祉サービスと連携して、総合的なサービスが提供できるよう努めます。</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】</p> <p>○入所前及び入所時のインテークを基本に、かわりがあった家族や近所の方などの会話する機会を増やし、入所前の生活やこだわりなど、情報を多くつかみ、生活している中でのこだわりを、生活歴と照らし合わせて、考える機会を増やす。(対応)インフル流行の後にコロナ対応となったので、面会や外出泊が一切出来なかった。ケアプラン更新時に家族へ電話を行い、情報収集を行った。把握できる範囲で、こだわりを大切にできた。○グループホームでのこだわりや、ケアプランの目標が掲げられた根拠を、会議等に参加できていない職員が、理解及び把握することで、根拠に基づいたサービス提供や方向性の統一を再認識することができるようになる。(対応)コロナ対策で、全員を集めての会議が開催できなかったため、朝の申し送りで細かく根拠を伝え、リーダーより発信する事で理解や把握に努める事ができた。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】</p> <p>開設から13年目を迎える事業所は、自然豊かな場所に立地している。母体法人は、市内を中心に医療法人や社会福祉法人を有するグループ企業で、地域において、「医療・福祉・介護」の三位一体のサービスを提供することができている。また、事業所では職員の退職が続き、落ち着かない時期があったものの、現在は職員が一丸となり、日々質の高いサービス提供を目指して取り組んでいる。さらに、老人保健施設で15年の介護経験がある管理者は、「ここでは利用者が自分の家のように自由に過ごし、当たり前のことを当たり前にできる暮らしを提供したい。認知症があっても、その時々を思いをくみ取り、ここで良かったと思ってもらえる施設にしたい」と考えるなど、地域密着型サービスにこだわりながら、地域に根差した事業所を目指している。</p>
--	---	---

評価結果表

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	入所前の面接時、入所直後の会話、毎日の会話で把握に努めている。ケアプラン更新時にも聞き取りしている。	○		◎	事業所には、利用者自身が望んで入居に繋がるケースは少ないものの、入居前に、職員が面接時調査票等を活用して、主に家族から思いや暮らし方の希望などの聞き取りをしている。また、入居前に利用者から思いや意向等を聞くことができないケースもあるため、入居後に、職員は利用者の様子を観察するとともに、生活に馴染み出してから声をかけて、話を聞くようにしている。さらに、日々の会話や表情から、職員は根気強く利用者の希望や意向の把握に努めるとともに、独自のアセスメントシートに詳細な情報を記載して、職員間で情報を共有している。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	生活歴を家族より聞き、会話の中から表情や返答内容で、思いを感じ取るようにしている。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	△	コロナで面会が全く行えず、ケアプラン更新時や電話するタイミングで家族と話し合う事が出来ていたが、会えていないのでよくわからないと言われる。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	月1回のユニット会で暮らし方への思いを話し、ケアプランの本人意向に記載している。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	いろいろな職員の意見を聞きながら、決めつけないように把握している。定期的に担当職員を交代して気づきを増やしている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	△	入所前の面接時、入所直後の会話、毎日の会話で把握に努めている。電話の都度、施設での出来事を伝えて、家族から聞き取りを行っている。			◎	入居時に、職員は利用者や家族、関係機関の担当者などから、様々な情報を得よう努めているものの、管理者は、「情報収集が十分ではない」と感じており、前回の目標達成計画に挙げて、事業所では取り組んできた経緯がある。また、入居前に、利用者が既に家族と同居していないケースも多いほか、居宅介護支援事業所の介護支援専門員からも詳しい情報が得られない場合もあるため、可能な場合には、職員が事前に自宅に訪問して、生活環境などの確認を行い、少しでも馴染みの暮らし方やこだわりなどの現状把握に努めている。さらに、病院から入居に繋がる場合には、サマリーなどの提供は受けるものの、その他の情報収集は難しく、入居後に得られる情報の方が多い。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	アセスメントを使い、見直し把握している。出来る事を行ってもらい、過度に手伝わず、出来る事を見極める事に努めている。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	△	本人の発した言葉を書きとめるようにしている。その都度の記録も夜勤時間は細かく記載するようにしている。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	△	体調面や環境面、何の目的なのかなど、予測をしながら、考えるように努めている。特に業の変更なども意識しているが、理解できていない社員が多い。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	介護記録に気づきを記載して、把握している。いつもと様子が違う時は、申し送りで共有している。				
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	生活歴や性格も参考に、検討している。状況により本人の気持ちや変化に気づき、より良い方法を検討している。			◎	介護計画の更新時に、職員は利用者や家族に意向を確認するほか、計画作成担当者を中心に、月1回開催するユニット会を活用して、職員間で話し合い、情報共有をしている。また、アセスメントシートの情報は、計画の更新に合わせて、新たな情報を追記しながら、本人の視点でより良いサービス提供などの検討をしている。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	できる能力を把握しながら、している事が毎日の生活で多くなるように検討している。電話で話したりの協力を頼んでいる。リモート面会も活用している。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	ケアプランのニーズへ記載する時に、困っている内容も記載している。また、申し送りノートにも記載して皆で共有している。				

愛媛県グループホーム小松の里

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	ケアプラン作成前に、本人の思いや意向を確認している。訴えられない利用者の表情から予測している。	/	/	/	介護計画の作成に際して、コロナ禍もあり、事前に家族に電話等で状況報告をした上で、希望や意向の確認をしている。また、事前に、利用者から聞いた意向などの情報をもとにして、ユニット会の中で話し合い、計画作成担当者を中心に計画を作成している。さらに、その時々々の状況に応じた利用者や家族の意向の変化を記載するとともに、意向に沿ったサービス内容となっている計画を確認することができた。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	面会が全くできない状況で、家族へ電話する時に、今の生活の様子を伝え、家族からも意見をもらえるように努めている。	○	/	◎	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	△	馴染みの関係や、離床時の座席等、心地よいと思ってもらえる配慮をしている。昔の話などを聞きながら散歩を行い記憶にも働きかけている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	×	コロナ対策で家族や地域の人との交流が出来ないため、盛り込めなくなっている。	/	/	/	
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	短期目標を記載して、実施記録を記入し、ユニット会で話し合っている。	/	/	/	介護計画の内容は、ユニット会の中で話し合いをしていることもあり、職員間で情報共有することができている。個別のケアプランファイルには、短期目標とサービス内容が記載され、サービス内容ごとに、日々のサービスの実施状況を記録しやすくなっているほか、モニタリングにも活用している。また、家族に送付する手紙には、介護計画のサービスの実施状況や新たな計画の提案等を行い、利用者の状況が少しでも多く、分かりやすい工夫をしている。さらに、介護記録には利用者の発した言葉や行動などを簡潔に記録に残すほか、内容により、赤色などの記載する色を変えて、分かりやすくしている。記録は、タブレットを活用して入力できるようになり、夜勤職員等の負担軽減に繋がっている。加えて、職員の気づきや工夫、アイデア等は、申し送りノートに個別に記録されている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	◎	短期目標を記載して、実施記録を記入し、毎日の確認と1か月の状況確認をユニット会で話し合っている。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	介護記録にも、普段と異なる会話や行動などを記載している。何もない一言も記録している。	/	/	/	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	○	その日にできる出来ない事の変化に対応し何が出来るか探し本人の変化に合わせて対応の変更などカルテに記入している。	/	/	/	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	介護計画の期間に見直しをしている。入退院などの後は、継続できるか暫定プランから始める時もある。	/	/	/	◎ 短期目標の設定期間に合わせて、概ね6か月に1回、介護計画の見直しをしている。また、入居時には1か月半で計画を見直すほか、退院時には1か月と状況に応じた期間で見直しをしている。さらに、新たな要望や変化が見られない場合にも、毎月実施するユニット会を活用して、利用者の現状確認を行っている。加えて、退院時などの状況に変化が見られた場合には、その都度関係者で話し合い、新たな計画を作成している。
		b	新たな要望や変化が見られない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	新たな要望や変化が見られない場合は、介護計画の期間に確認している。ユニット会で毎月1回は確認している。	/	/	/	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	入院後の再入所時や、心身状態に変化がある時は、見直しをしている。暫定プランを作成するときがある。	/	/	/	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	ユニット会を基本としているが、朝の申し送り時や、その後のユニットメンバーで適宜話している。緊急時は申し送りノートや気づきノートを使っている。	/	/	○	月1回ユニット会を実施するほか、毎朝8時45分から30分程度、管理者が参加した3ユニット全体の申し送りを実施している。また、問題事項や会社からの申し送り事項も、申し送りの場で情報を伝達している。また、事業所では会議や申し送りの内容は申し送りノートに記録を残すほか、参加できなかった職員は確認後にサインを行い、職員間で周知を図る仕組みづくりをしている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	コロナ対策で密をさけるため、ユニット会も少人数で行っている。利用者の変化に対して、気づきを日々社員で話し合い共有している。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	△	コロナ対応で、全員が集まることを避けている。いつも一緒に仕事をしているメンバーとユニット会のみ開催している。	/	/	/	
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	△	会議録を回覧して、申し送りノートも活用しているが、目を通すだけでは、細かいところまでは、わかっていない。	/	/	/	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	○	申し送りノートを毎日確認して、サインをしている。少し思い違いも生じている。	/	/	/	○ 毎朝、3ユニット合同で申し送りを実施している。また、職員間で情報伝達すべき内容は、すべて申し送りノートに記録するとともに、職員は出勤時等に確認して、サインを残している。さらに、重要事項や大事なことは、毎日申し送り等を活用して、繰り返し管理者等が口頭で伝え、確実な伝達に繋げている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	個別の情報を小まめに申し送りノートへ書き毎日確認して、サインをしている。受診時は病院へ送付したFAX用紙に、受診した内容を記載して、皆で共有している。パソコンで受診記録を閲覧できるようにまとめている。	◎	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
(2) 日々の支援										
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	その時にしたい事を、限られた職員数で、できるだけ叶えられる努力を日々行っている。全員に実施できない日もある。				おやつや飲み物、やりたいレクリエーション、着替えなど、全ての日常生活において、職員は利用者の意向を確認するほか、利用者自身で選んでいただくことを基本として、その時々気持ちに寄り添った支援に取り組んでいる。また、利用者確認することで不安が生じるなど、自己決定しにくい利用者には、職員から事前に把握した好きなことを勧めるなど、状況に応じた対応をしている。さらに、起床時間や就寝時間、入浴回数など、利用者の意向に沿った支援に努めている。加えて、手伝いをしてもらった後には、職員が「ありがとう」などの感謝の言葉を伝えたり、利用者が話をしたようなタイミングで見計らって話しかけたりするなど、利用者の活き活きた表情が引き出せるような雰囲気づくりも心がけている。	
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	△	入浴、排泄、更衣、食事場面で、選んでもらう機会を作っているが、選べる利用者が少なく社員が好きそうな物を選んでいる事が多い。			○		
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかるかに合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	不安が大きくなるように、できる限り意向を聞きながら、決めてもらっている。時間がかかる利用者が中心となり、支援できない時もあるが、その日の利用者気分に応じて対応ができています。					
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	本人の生活リズムを優先して、ゆっくりと生活できるよう支援している。基本的な時間は決めて、タイミングを図りながらペースを見て合わせている。					
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	◎	社員が利用者の輪に入り、一緒に手作業や会話をし、気の合う利用者テーブルを囲み雰囲気づくりをしている。					○
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	スキミングや声かけを行い表情の変化を見ながら支援している。意思疎通が困難でも体調が良い時は、名前を呼んでいつも以上に長く接するように心がけている。					
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	勉強会や朝の申し送りで、接遇マニュアルを意識して、言葉かけや態度を意識している。焦ってしまい言葉がきつくなる時がある。申し送りで適宜意識している。		◎	○	職員は人権や尊厳等を学び、理解している。時には、申し送り時などに、多忙さなどから、不適切な言葉や配慮に欠ける言葉を発する職員が見られるため、その都度職員間で話し合いをしたり、管理者は率先して職員に意識した言動を行うように伝えたりするなど、繰り返し気づきや注意を促している。また、毎朝実施する申し送りで、職員は理念を唱和するなど、より質の高いサービス提供に努めている。さらに、居室へ出入りする際には、利用者が入室時にはノックや声かけをしてから入室してきている。時には、洗濯物の収納などで入室する際に、利用者が不在の場合があり、事前の声かけができていない職員も見られるため、管理者等は、「十分に気をつけた対応をしたい」と考えている。	
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	○	小松の里の心がけ「あたたく、さりげなく、気くばり目くばり」を意識しながら対応している。焦ってしまい言葉がきつくなる時がある。					
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	△	他者から見えないような配慮や、露出が少なくなる配慮をしながら介助している。見守りを行う際に、戸が開いたままとか大きな声で聞く社員がいる。					
		d	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	入室前にノックを行い、入っても良いか確認してから出入りしている。部屋の掃除をする時も、部屋に入ると一歩かけてから行っている。					○
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	入職時に会社と職員でプライバシー保護の書類を交わっていて漏洩しないよう厳守している。					
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けを求めたり教えをもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	介護を行う場面でも、手伝ってもらい声かけや、教えてもらう態度で接している。利用者にお礼します、ありがとうございますと感謝を伝え助け合いで出来ている。				職員は利用者の状況や関係性を理解するとともに、利用者同士が支え合い、心地良く過ごせるよう配慮などの考慮をしている。また、少トラブルを起こしやすい利用者もおり、利用者同士がトラブルになりそうな場合には、職員が早期に間に入るなど、陰湿な雰囲気や和らげられるような対応に努めている。さらに、リビングにあるカレンダーは、毎月利用者が協力して作成をしている。	
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	利用者同士が協働できる座席の配慮を行い、支えあう事を理解している。					
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わえる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらい場面をつくる等)。	△	その時の気持ちを考えながら、心地よく関係が良好になるように、支えあう関係ができるように、座席の配慮を行っている。利用者の方で他者の行動に不満が多い方が、否定したり怒ったりと、攻撃的になるため、狭い空間では難しいと感じる。					○
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	トラブルの原因を考え、双方が安心できるように、声かけを行っている。どちらの発言も否定しないように努めている。					

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	△	入所前の面接で、関係を聞き取り、面会時に家族より、関係について情報を得ている。利用年数が長くなると、家族以外との関係が少なくなっている。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	入所前の面接や、居宅ケアマネからの情報提供を参考に、毎日の会話からも、想像しながら把握に努めている。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	利用が長くなった利用者は、施設内での馴染みの関係作りが出来ている。コロナ対応で、家族や友人とは、面会する事が出来なくなっていて、数人はリモート面会に対応していたが、意欲し面会を再開して県内在住者とだけ交流が再開となっている。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	×	入室を全て断っている。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない)(※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	◎	外に出たい気持ちの時は、とりえず戸外へ出るように対応している。全く出ようとされない利用者は、社員が誘っている。特に落ち着けない行動がある利用者には中庭の散歩など、適宜外出で気分転換を図っている。	○	○	○	コロナ禍において、事業所では以前のような外出はできていないものの、事業所の裏には広々とした庭があり、日頃から利用者は自由に戸外に出ることができ、少しでも気分転換を図れるよう努めている。また、ユニット間の移動や利用者同士の交流支援もしている。さらに、外出できる機会は減っているものの、感染状況を見計らいながら、ドライブに出かけるほか、近隣の散歩などに出かけられるようになってきている。加えて、重度の利用者も中庭に出て、外気浴ができるよう支援している。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	コロナ対応で社員以外の外出支援は行っていない。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	○	中庭を中心に、外気浴を行っている。			○	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	×	コロナ対応で人が集まる場所へは一切外出できていない。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	感染予防で全体で集まる勉強会は中止している。申し送り状況で聞きながら、認知症を理解できるように、検討をしている。				更衣や入浴、排泄、食事、移動などの生活場面において、職員は利用者には極力手を出さず、見守りや声かけを行うなどの待つ介護に努めている。また、利用者自身のできることや、できそうなこと、その過程における気づきなどをユニット会や申し送り等を活用して、職員間で話し合いをしている。さらに、長年勤務している職員と若手職員には、馴れ合いの考えなどに意識の差が見られるものの、管理者は職員への気づきを促しながら、より良いサービス提供に努めている。加えて、事業所では体操や脳トレなどを取り入れ、少しでも利用者の心身機能の維持が図れるよう取り組んでいる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	感染予防で全体で集まる勉強会は中止している。申し送り状況で聞きながら、認知症を理解できるように、看護師や理学療法士のアドバイスを参考に検討をしている。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	△	出来る事や出来そうなことの気づきを、職員同士で話し合い、できるだけ、行ってもらうように意識している社員と、できそうなことでも、気長に見守ることをせず社員が行ってしまうことがある。	○		○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	◎	入所前の聞き取りも参考に、手先を使う事なども新たに行ってもらい、興味のあることや、積極的に行いたいことの把握に努めている。				洗濯物干しやたみ、食材の下ごしらえ、お盆拭きなど、利用者には決まった時間にできることを役割として担ってもらうほか、終了後には感謝の言葉を伝えて、利用者一人ひとりの張り合いにも繋げている。また、訪問調査時には、ぬり絵や脳トレ、お盆拭きなどを活き活きとした表情で行う利用者の様子を見ることができた。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	◎	できることを、役割として行ってもらっている。食材の下ごしらえや家事仕事につながる事を、レベルに応じて行ってもらっている。脳トレ(手作り文字合わせ絵合わせ等)も高評価の様子。誕生日会は本人が主役で出来るだけ誕生日の日にイベントを行っている。	○	○	◎	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	×	コロナ対応で、ホーム周辺の散歩しかできないため、地域との交流がない。				

愛媛県グループホーム小松の里

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	◎	着たい服を着ていただき、着こんでしまう方や肌着を上に着てしまう方、重ね着をする方へ、さりげなく着替えてもらっている。				整容の乱れや汚れが見られた場合には、職員がさりげなく声かけを行い、人目のつかない場所に移動してサポートをしている。また、昼食時にはエプロンを使用することなく、食べこぼしのあった際に、さりげなくティッシュペーパーを使用して拭き取る様子を見ることができた。さらに、馴染みの美容師の訪問があり、一人ひとりの好みを把握して、髪型や毛染めなどの対応をもらい、喜ばれている。加えて、重度の利用者も、居室からリビングへ出る際には、家族が持参した好みの服に着替えることができています。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	○	近隣のパーマ屋に希望を伝えて、利用者が好まれる髪型になるよう支援している。持参されるお気に入りには使用してもらっている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	△	利用者に聞くこと不安や不穏になる場面が多く、社員が選んだ服を着てもらうことが主となっている。持ち込みされた馴染みの服から選んでいる。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	外出時は、利用者がよそ行きと感じている服を選んで、選んだ服に着替えてもらっている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	さりげなく綺麗に整えている。間違えていても、無理強いない対応をしている。		○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	○	近所の美容院が馴染みの関係となり、希望を聞きながら散髪してくれている。馴染みの店には外出禁止のため対応できていない。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	家族からも好みを聞き取り、本人の好まれる服など持ち込まれている。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	△	下ごしらえから、音、匂いなど、食べる前から感じられる生活臭と、見た目や味など大切にしていたが、社員不足で昼食は提供できなくなった。				事業所では職員の勤務体制により、昼食は外注のレトルト食品を活用して、食事を提供しているものの、朝食と夕食は、ユニット毎に職員が献立を立て、食材の下ごしらえやお盆拭きなど、利用者にてできることを手伝ってもらいながら、職員が調理をしている。コロナ禍や利用者の高齢化等もあり、食材選びや買い物は、職員が担当をしている。献立を作成する際には、アレルギーのある食材を排除するとともに、利用者の食べたいメニューを聞き、取り入れることができています。また、利用者の誕生日には、リクエスト食と手作りケーキを提供して、利用者に喜ばれている。食器類は事業所で用意しているものの、利用者に好みの物を選んでもらい、分かるように名字を記載して使用をしている。朝食と夕食の際には、職員は利用者と同じ食事を一緒に摂りながら、見守りやサポートをしている。昼食の際には、職員は利用者のサポートに専念し、職員は会社の補助を活用して注文した配食弁当などを、別々に食べている。さらに、リビングに面したオープンキッチンで調理しており、利用者は調理の音や匂いで、食事の雰囲気を感じることができている。加えて、献立のバランスや調理方法などを職員間で話し合うほか、利用者の病状などに応じて、必要な場合には、栄養士と連携を図ることができている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	朝と夕はユニットでメニューを考え、リクエストを聞きながら献立を作り、できる方には、食材の下ごしらえを行ってもらえる支援をしている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	△	調理の下ごしらえや、後片付けが出来る利用者へお願いしている。買い物、調理、盛り付けは混乱や不安が多く、利用者から文句も出るのでできない。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入所前の面接時にアレルギーや苦手な物を聞いている。生活が始まり、毎日の会話で聞き取りや、食べ残しを見て把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	昼食がレトルトになったため、今までより提供するメニューが大幅に少なくなっている。誕生日食を利用者の誕生日に合わせて行い、リクエスト食やお祭りの日にお寿司を作るなど季節感が出せる工夫は行っている。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法としつつ、おしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	嚥下や咀嚼を確認して、彩りや見た目を意識して、食べやすさの配慮も意識しながら、綺麗に盛り付けている。レトルトの提供時にも見ばえよく彩りを考えて出している。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	利用者のこだわりを優先して、利用者を選んでもらっている。使っている様子も確認している。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	△	昼はメニューが違うので一緒に食べないで遠目で見守っている。夕食は同じメニューで食卓を囲み食べている。			◎	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	調理のにおいや音を大切に、ユニット内で朝と夕は調理している。配膳後も、意欲が高まるように声かけを行っている。食べる時間もその時々で、利用者のペースで行っている。		○	○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	△	食事量や水分摂取量は、十分にとれるように気を付けている。食事やお茶で補えない時は、メイバランスゼリーやエンシュワリキッドも活用している。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	水分摂取の少ない方には、好みの飲み物やお茶の時間に限らず何回も出している。水分量が少ない日に、主治医へ相談して必要時は通院で点滴を行っている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	職員でバランスや調理方法を話し合い、ユニット単位でメニューを決めている。現在は栄養士の指示が必要な利用者はいない。必要時は栄養士と連携を図る。			◎	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	食中毒への予防や衛生管理は気を付けている。食事直前のテーブル消毒や手指消毒も毎回行っている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながる事を、研修や勉強会で学び理解している。				職員は口腔ケアの重要性を学んでいる。食後に、職員は利用者へ声をかけ、歯磨きなどの口腔ケアを実施している。また、自分で歯磨きができる利用者の口腔内の健康状況の十分な確認までには至っておらず、次の歯科受診までに不具合や口腔内の異常が発生していることもあるため、口腔ケアの重要性を再認識し、定期的に全ての利用者の口腔内の状況が把握できる工夫を期待したい。さらに、口腔ケアのサポートが難しい利用者や不穏な利用者もいることもあり、管理者は「口腔内の衛生管理は難しい」と感じている。加えて、異常が見られた場合には、歯科医の往診などに繋げている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	口腔ケア時に目視して、気になる時は、家族へも説明し同意のもとで、歯科受診や往診の依頼をしている。			△	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	歯科往診時に、個別に気を付けるポイントを教えてもらっている。他の利用者へも学んだ知識を参考にしていく。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	無理強いしないように、手入れを行っている。入れ歯洗浄剤も活用している。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	口腔ケア時に目視して、気になる時は、家族へも説明し同意のもとで、歯科受診や往診を依頼している。義歯出し入れうがいを拒否される方には難しい。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医を受診するなどの対応を行っている。	◎	口腔ケア時に目視して、気になる時は、家族へも説明し同意のもとで、歯科受診や往診を早期に依頼している。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	◎	勉強会でトイレでの排泄の重要性や、おむつ使用による精神的負担を把握し理解している。布パンツから紙パンツへの移行については、かなり慎重に行っている。経済的負担も配慮している。				事業所では、トイレでの排泄支援を基本としている。また、排泄用品の使用には経費がかさむため、可能な範囲で極力排泄用品の使用はしないように取り組み、職員は声かけやトイレ誘導を行い、布パンツで過ごすことのできている利用者もいる。さらに、利用者一人ひとりの状況に応じて、適切なパッドやおむつなどの排泄ケア用品を職員間で検討するとともに、家族にも説明の上で使用している。加えて、入院時に、おむつや紙パンツで過ごしている利用者も多く、退院時に職員は、パッドや布パンツの使用など、早期にもとの状態に戻せるように取り組んでいる。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	食事、水分量や、運動不足などの原因及び、便秘が周辺症状に影響することを理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	訴えられない利用者の行動をみながら、排泄したい気持ちをソワソワしたり立ち上がりやすくなる行動や表情から予測している。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	自己負担でおむつ使用する利用者は購入してもらうため、その時々で注文の種類を検討している。業者もコストが高くない所を紹介している。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	普段の生活場面を見直し、主治医とも相談して、改善できる点を模索している。センナのお茶を煎じて、調整もしている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	利用者の動きや訴えに応じて、行きたい気持ちを予測してトイレの案内をしている。無理強いほしないように気を付けている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一時的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	自己負担でおむつ使用する利用者は購入してもらうため、その時々で注文の種類を検討している。朝と夕のユニット内での申し送り、どの種類が良いか、変化がある時に検討している。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	◎	家族にも状況を共有してもらい、状況に応じて使い分けができるように揃えてもらい、布パンツにしたり紙パンツとパッドにしたりと対応している。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	くだものや、オリゴ糖、センナ茶など、できるだけ自然に出るように取り組んでいる。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	○	毎日入れる状況を作り、入りたい気持ちになっているタイミングで入浴できるように支援している。回数も決めずに、誘い入れるようにきっかけを作っている。	◎		○	事業所では、毎日午後から入浴できるように準備しており、利用者の希望に応じて、毎日の入浴支援も可能としている。また、夕食前後の時間帯に、入浴する利用者もいる。さらに、入浴を拒む利用者もおり、目標は2日に1回の入浴ではあるものの、週2〜3回を目指して、職員は声かけや誘導を試みている。加えて、湯の温度や浴槽に浸かる時間は、利用者一人ひとりの好みに対応している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分に入浴できるよう支援している。	◎	1人ずつ入浴できるように、ゆっくり利用者のペースで入浴してもらっている。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	できている事は手伝わないで見守りや声かけで入浴してもらっている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	家族からも自宅での習慣を聞きながら、入りたい気持ちになるよう支援している。誘い方も工夫して、浴室までの案内を行っている。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴介助の手順書を参考に、健康状態の把握をしている。いつもと血圧や脈拍が違い不安な時は、主治医に相談して指示を受けている。入浴前に必ずバイタルチェックを行っている。				

愛媛県グループホーム小松の里

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	自宅での様子や入院中の様子を本人及び家族へ聞き取り、ホーム内での眠れる時間を把握している。	/	/	/	事業所では、安易に薬に頼らない支援に取り組んでいる。入居前から内服していた眠剤などの薬を止めることは難しいものの、利用者が眠れない場合には、職員と一緒にフロアで過ごし、居室でテレビを見たりするなど、無理強いすることなく、一人ひとりの生活リズムを大切に、できる限り自由に過ごしてもらっている。また、不眠が続く利用者には、医師に相談を行うほか、日中の過ごし方の工夫を行うなど、安眠が得られるよう支援にも努めている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	昨夜の様子や日中の様子を確認しながら、気持ちよく眠れる工夫を検討している。空調や湿度も確認している。水分補給もやっている。	/	/	/	
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	睡眠導入剤や安定剤は極力使用しないで、生活リズムが整えるように、日中の過ごし方、体調、水分量などを検討し、往診で主治医に適宜相談している。	/	/	○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	夜間眠れないから寝させない対応は行わず、疲れ具合に応じて日中も休む時間を取り入れている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	利用者からの要望に応じて、支援している。年賀状は届いた方に利用者名で返事を送っている。電話も希望時には直ぐに行っている。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	電話番号を教えて自らかけている方もいる。自分でかけられない方は、希望があれば、職員が番号を押してコードレス電話で話してもらっている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	コードレスを使用して、部屋で電話できるようにしている。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	封は開けずに、本人へ渡し、本人に開けてもらい、希望があれば、代読している。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	限られた利用者の家族から電話がかかっている。手紙も限られた家族より届いている。本人から電話をかけることは、家族も了解している。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	小銭を持っている方はいるが、持っているだけでも本人の安心につながっている。	/	/	/	
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	×	買い物に行きたい意向がない。勤めても希望されない方が多い中、外出は中止している。	/	/	/	
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	買い物に行きたい意向がない。勤めても希望されない。いつでも買い物に行ける事は会話の中で伝えている。	/	/	/	
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	所持することで、不安や混乱が強くなる場合は、家族と相談しながら、家族が管理するほうが、QOLが高まるか検討している。	/	/	/	
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	常に状況に応じて、本人及び家族と相談して決めている。	/	/	/	
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしておき、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	基本的には、預からないようにしていて、ホーム立替で引き落とし、領収書を家族へ送付している。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	職員人数と相談しながら、個別にできるだけ希望に添えるよう取り組んでいる。	/	◎	◎	遠方に住んでいる家族のほか、家族の都合がつかない場合には、職員が通院の同行支援をしている。また、事業所では、支払いの立て替えや自宅へ郵便物を取りに行くなど、利用者や家族の希望に沿った柔軟な対応を心がけている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと		
(3)生活環境づくり											
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	朝7時から夕方17時まで、施錠しないで、常に出入りできるようにしている。	◎	◎	◎	事業所には広々とした駐車スペースがあるほか、玄関前に手入れされた花壇に咲いている紫陽花が季節を感じさせてくれ、出入りしやすいような雰囲気を感じられる。		
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものを置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。)	○	作り自体が、利用者のイメージしている大正や昭和の雰囲気ではないが、食事作りの音や匂い、生活臭が感じられる環境となっている。	○	○	○	事業所の玄関ホールには観葉植物や飾り付け、自動販売機などが置かれているほか、中に入ると広々とした中庭に面しており、風が通りもよく、開放感がある。リビングには、ぬり絵や習字などの利用者の作品が展示されているほか、小上がりの畳スペースもあり、落ち着いた空間となっている。また、新聞やチラシでゴミ箱を折るほか、ぬり絵やレクリエーション活動が自由にできるように用具が置かれている。さらに、毎日職員が掃除を行うほか、空気清浄機も設置され、いやな臭いもなく、清潔が保たれている。加えて、建物周囲には自然が広がり、心地良い風が吹き抜けるとともに、中庭に出ると裏山の新緑が、利用者や来訪者に季節を感じさせてくれている。		
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	△	利用者にとって不快にならないように、配慮している。掃除も丁寧に行っている社員ときれいに出ていない社員がいる。					◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節を感じるもの)を生生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	食事作りの音や匂い、生活臭が感じられる環境となっている。観葉植物や思い入れのある人形や置物、家族が持ってきた花も飾っている。季節のカレンダーを毎月利用者と一緒に作成して、みんなが見える所に貼っている。	○					○
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合う利用者同士で、安心できる座席があり配慮している。ソファを置いたり、玄関フロアや中庭も活用している。	○					
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	○	直接見えないように配慮している。	○					
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	入居時に家族と本人へ、馴染みの物を持ち込んでもらい、家族が持ち込めない時は、職員が付添い荷物を運んでいる。	◎		○	居室には、ベッドやエアコン、クローゼット、広い洗面台が備え付けられている。利用者は、テレビや衣装ケースを持ち込んでいるほか、たんずやすいなどの使い慣れた家具や家族の写真などに囲まれ、心地良く過ごせるよう工夫された居室も見られる。		
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	利用者が安全に使いやすいよう、手すりや車椅子専用トイレの手すり取替を行っている。			○	トイレの間口は広く、表示のされていないユニットもあるものの、分かりやすい構造となっている。また、廊下やトイレには、利用者が使用しやすいように工夫された手すりが設置されているほか、利用者の状態に応じて、居室の表札などの表示のないユニットもある。さらに、状況に応じて、居室の入り口の名前の上に飾りをつけるなど、利用者が少しでも混乱しないよう分かりやすい工夫もしている。		
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	全てを排除するのではなく、極力間違いにくい環境にしている。間違っても、さりげなく取り除くなど、自尊心を気づけないようにしている。						
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	○	活動意欲を触発するように、ほうきや、回転モップ、新聞や広告、趣味の品など置いている。怪我につながる裁縫道具やハサミなどは、依頼があれば、すぐに出せるようにしている。						
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。(鍵をかけられ出られない状態で暮らすことへの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)	○	鍵をかける事への弊害を職員全体で理解して、緊急性を除いては、常に施錠しないようにしている。17時以降は防犯対策で、自宅と同様に施錠している。屋外からの侵入を防ぐ目的。内側からは、玄関も開けられる鍵にしている。	◎	◎	◎	職員は、鍵をかけることの弊害を十分理解しており、日中に玄関等の施錠は行われていない。また、夜間は以前から玄関の施錠をしていたものの、現在は警察署からの指導で、17時から7時までの間、防犯対策のため施錠をしている。また、外に行きたい利用者には、職員が寄り添いながら、気が済むまで一緒に付き添う支援にも努めている。		
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	入居時に十分説明して、納得してもらい利用が始まっている。また、安全確保のため、職員が付添いしている状況を伝えて理解してもらっている。						
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)。	◎	玄関に感知センサーを設置して、東通り職員が毎回、玄関を見に来る事を徹底して行っている。利用者の行動を予測して、出たい気持ちの時は、職員が付添い出かけて、落ち着いたままにしている。						

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	入居前の情報を共有して、アセスメントに病歴を記載し、把握に努めている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	身体状況の変化や異常のサインは、カルテや申し送りノートを活用して、早期に発見できるよう努めている。しかし、気づきに差が生じている。何か変わった事があったら、メモを取り他の社員に報告している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	協力病院の西条市民病院へ連絡し常に担当看護師や医師に確認している。通院時にFAXした事も医師からの指示をカルテに閉じている。内科、外科以外の専門領域は、近くの病院を受診している。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	かかりつけ医の希望を聞いて、大半は協力病院の西条市民病院だが、専門医は併用して通院介助をしている。		◎		
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	本人及び家族の希望を優先して、かかりつけ医と連絡相談を行っている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	通院前に家族へ説明して、通院時に家族も立ち合える配慮をしている。通院介助は施設で行い、家族が立ち会えない時は、受診後に報告している。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	介護サマリーを入院当日に病院の担当看護師へ情報提供して、口頭でも配慮してほしい所を伝えていく。市民病院専用の情報提供書も作成している。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	入院中の洗濯物を施設が取りに行くことで、病院の関係者と話す機会が常にあり、情報交換を密に行っている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	日頃の連携はもろんの事、通院時には相談員や外来看護師と交流を図っている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	夜勤専属看護師や常勤看護師へ日頃の様子や、受診した結果など報告し、容態が気になる時は、様子を見てもらっている。看護師不在の時間は、かかりつけ医や外来看護師、休日など病院が休みの時でも、入院担当看護師に相談している。皮膚トラブルの様子は写メをラインで送り相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	協力病院は夜間でも相談できるように配慮されている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	朝昼夕に血圧、脈拍、熱を測定して、状況に応じて血中酸素濃度も測定しているので、変化には気づきやすい。気になるときは、外来看護師や主治医に相談している。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	医師から指示がでた処方内容が詳しく書かれた書類を保管して、薬剤師の説明を聞いている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	薬剤師が一包装した薬を指示通り飲んでもらえるように、薬袋の色分けや、本人確認、飲み込み確認を行っている。薬箱も活用している。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	普段の状態と違って来た場合に、常に副作用が影響していないか、追加された薬など影響がないか確認している。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	長年飲み続けている服薬も、状態の変化が気になる時は、必要性があるが医師と相談している。				

愛媛県グループホーム小松の里

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	重度化した場合に、適宜、本人に安全で快適に過ごせる場所を家族と一緒に考えている。急変時には、延命治療を希望するかなど、入居時に確認している。	/	/	/	事業所には、「重症化した場合の対応に係る指針」があり、重症化に伴う医療ニーズに応えるため、協力医療機関との連携体制などを家族に説明をしている。また、地域において、24時間体制で医療連携を確保することが難しいため、事業所として、看取り支援体制は取っていないものの、管理者等は、「できる限り住み慣れた環境で過ごしてもらいたい」と考え、関係者を交えて話し合い、利用者や家族の希望に応じて、ぎりぎりまで事業所で生活が送れるよう支援している。さらに、事業所で対応できなくなった場合には、家族と話し合いながら、病院や特別養護老人ホームなどに転院をしている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	医療行為の必要性など、グループホームで安全に提供できないと予測される段階で、主治医から説明をもらい、受け入れ先を家族と一緒に検討している。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	環境面や医師の協力(死亡時の訪問など)が整わない。現状では、看取りができない環境と判断している。	/	/	/	
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	◎	入所前の説明や、状態の変化に応じて、出来る事できない事を十分に説明して、理解してもらっている。	/	/	/	
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	重度化した場合に、適宜、本人に安全で快適に過ごせる場所を家族と一緒に考えている。グループホームで環境面での改善は考えていない。同じグループ内で支える事や、近隣の施設を提案している。	/	/	/	
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	最後まで責任を持って住み続けられるように、その時々で施設紹介などを説明している。	/	/	/	
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癩、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	感染症について、毎年勉強会を実施していたが、コロナ対応で全員が集まることを避けているため、今までの資料や時期になると、申し送り等で呼びかけを行い、早期発見、早期対応に努めている。	/	/	/	
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	勉強会で知識を学び、数年前にノロ疑い感染者があった時に、実践で経験して、他のユニットにも経験を共有している。西通りのESBL耐性の対応を実践で学んでいる。コロナ対応の感染対策も実施している。	/	/	/	
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	◎	愛媛県の情報を元に、往診時に主治医から聞くなど、情報を早く入手している。	/	/	/	
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	◎	保育所や小学校中学校の情報を、職員から得て、流行を把握している。	/	/	/	
		e	職員は手洗いやうがいなども徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	介助の後は手洗いを徹底している。自宅での検温後、入室前に検温、ユニット内での検温を実施。マスク着用も徹底している。面会は禁止している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	月に1回の文書報告とケアプラン作成時に日常の様子を伝え、現状を把握してもらえるように伝え、一緒に支えてもらえるよう話をしている。	/	/	/	コロナ禍において、事業所では外部からの出入りが制限されており、家族が活動に参加できる状況となっていない。ガラス越しやオンラインの面会に対応するなど、事業所として、利用者が家族とかかわる機会を模索しているものの、高齢化や認知症状の進行に伴い、家族を認識しづらい利用者も増えてきている。また、家族には毎月利用者の様子を手紙で報告するとともに、2か月に1回広報紙を発行し、多くの写真を活用して分かりやすく行事や日常の様子を伝えている。さらに、事業所の運営上の事柄や出来事は、運営推進会議の中で報告しているものの、書面開催において報告は2家族のみに留まり、利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職等が十分に伝わっていないことがうかがえるため、広報紙を活用して出来事を報告したり、コロナ禍の収束後には、来訪時に家族に伝達したりするなど、全ての家族に理解が得られるよう職員間で検討することを期待したい。加えて、電話連絡時や来訪時を活用して、職員は利用者の様子を伝えるほか、家族の意見や希望などを気軽に言ってもらえるような声かけをしている。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	△	面会時は部屋でゆつりと他者を気にせずに、面会できるよう配慮している。家族の希望があれば宿泊してもらえる体制はあるが、コロナ対応ですべて禁止している。窓越し面会とリモート面会は実施している。	/	/	/	
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	×	ホーム内の活動に限られている。ホーム周辺の散歩は行っているが、コロナ対応で外出や外部参加の行事は行っていない。	/	○	△	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	日常の様子を毎月1回、日常生活・ケアプラン実施状況報告書で郵送して伝えている。介護計画作成時は、遠方の家族へ電話して意向を確認している。2か月に1度作成している広報紙も郵送している。	/	◎	○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的な内容を把握して報告を行っている。	○	電話で不安家族が知りたい事など、社員から説明している。不安が大きい時などは、相談員(ホーム長)から再度の電話をしている。	/	/	/	
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	入所後は、家族がしっかりと休息できて、気持ちに余裕が持てるよう支援している。在宅介護で大変と感じていた内容を聞き取り、ホームでの対応を伝え参考にしてもらっている。	/	/	/	
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	運営推進会議を書面開催で2か月に1回報告を行っている。運営上の事柄、職員の異動や入退職等を伝えている。	/	×	△	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	×	コロナ対応で働きかけは出来ていない。	/	/	/	
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	ホームの職員体制と環境の説明を行い、利用者個別に起こり得るリスクを説明し、対策も伝えている。	/	/	/	
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的にしている。	○	些細な事も報告して、面会時も気軽に話してもらえるように、職員から話しかけている。	/	/	○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	◎	入所時の説明を丁寧に行っている。事例なども伝えている。良い面や悪い面も伝えている。	/	/	/	
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	退所の時も経済面や環境面、その時々々の身体状況に応じて具体的な説明を行い、本人が安心できる所に住み替えるよう支援している。	/	/	/	
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	契約時や変更時に料金の内訳を文書で示し、丁寧に内訳を説明している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	運営推進会議のメンバーや、地域の方から質問があれば、適宜説明している。	/	○	/	コロナ禍において、法人・事業所として、感染対策で外部との接触制限が設けられ、地域との交流できる機会は激減しており、現在は事業所周辺の散歩時のあいさつ程度に留まっている。また、事業所として、自治会へ加入していないものの、コロナ禍以前は、地域からの声かけて、ボランティアの来訪があったり、地域の行事やイベントに利用者と一緒に出向いたり、事業所で夕涼み会を開催するなど、地域と深く繋がることができていた。コロナ禍の収束後には、少しずつ地域との交流が再開できることを期待したい。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	△	ホーム周辺を散歩しながらあいさつをしている。しかし、あまり地域とのかかわりが無い。コロナ対応で人が集まる所への参加は避けている。	/	×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	△	顔見知りの地域の方が増えるように、あいさつを行っている。犬の散歩での顔なじみの方も増えている。	/	/	/	
		d	地域の方が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	○	運営推進会議をきっかけに、気軽に立ち寄れる関係を作っているが、現在はコロナ対応で立ち寄れない。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	○	運営推進会議をきっかけに、気軽に立ち寄れる関係を作っている。草引きをしながら、隣の畑の方と話したり、犬の散歩も効果的に感じる。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	△	散髪依頼を近所の、のりこ美容室に依頼している。コロナ対応でその他の広がりはずれていない。	/	/	/	
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	△	小松図書館より毎年、作品依頼があり、出展している。中学生との交流は現在中止している。先生とのやり取りは続けている。	/	/	/	
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	○	小松図書館、のりこ美容室、ウエス注文は小松の大磯タオルに注文など、理解を拡げる働きかけを行っている。	/	/	/	
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	△	書面開催で集まることは行っていない。	○	/	△	コロナ禍において、運営推進会議は書面開催となっている。コロナ禍以前の参加メンバーを対象に書類を送付しているものの、事業所として、市担当者など、今までのメンバーが継続できているかどうかの確認もできていないため、自宅や職場を訪問したり、電話連絡をしたり、書類の送付時に、アンケート等を同封して返信をもらうなど、コロナ禍においても、意見や連絡を取り合える体制が確保できることを期待したい。また、以前は、全ての家族へ会議案内を送付していたものの、一部の家族しか参加協力が得られなかったため、現在は固定された家族への案内や書類の送付に留まっている。さらに、送付書類において、利用者の様子やサービスの実際、評価への取組み状況を報告しているものの、一方通行の報告に留まっているため、参加メンバーからの意見や提案を日々の取り組みやサービス向上に活かしながら、会議の中で結果報告できるような工夫を職員間で検討することを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告している。	○	外部評価の後に、報告している。防災対策は度々テーマとして協力を仰いでいる。	/	/	○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	×	一方的に書類を送付するだけになっている。	/	◎	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	×	書面開催後に次回予定日を伝えている。	/	/	○	
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	○	外部評価の閲覧場所に、運営推進会議のファイルを置いていつでも見れるようにしている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	△	名札の裏に理念を入れて、いつでも確認しながら仕事ができるようにしている。仕事中は名札をしていないため確認することが少なく、理念を理解している社員は少ないと感じる。	/	/	/	
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	施設内に提示している。運営推進会議に参加されていた方には、理念を伝えていた。	○	◎	/	
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者:基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	管理者が代表して、代表者へ今の状況を伝え、必要な研修など受けられる配慮をしてくれている。コロナ対応で現在は外部への研修参加は中止している。	/	/	/	系列を含めて、法人組織が大きいため、代表者等の来訪はほとんどないものの、職員から出された意見は管理者がまとめて、代表者に伝えることのできる仕組みが整備されている。また、職員は、「何でも管理者に相談でき、働きやすいと感じている」ものの、管理者は、「人員不足で事業所の実情の理解と、協力してもらえていない」などと感じている。さらに、法人・事業所として、職員のキャリアアップや育成方針があり、外部研修の参加費用の助成制度はあるものの、コロナ禍において、外部研修の参加制限が設けられ、職員は参加することができず、現在は内部研修等に留まっている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	キャリア段位制度を参考にして、働きながらスキルアップできる取組を続けている。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	管理者が代表して、代表者へ今の状況を伝え、給料面や手当など、特に頑張っている職員へ配慮してもらっている。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	代表者は外部との交流や研修に費用を惜しまず、行きたい研修に参加できるように予算を入れてくれている。コロナ対応で外部への参加は中止している。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	×	ストレスを分散するのは難しい。そういった環境づくりはできていないと思う。	○	○	△	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	勉強会でみんなが集まる機会を中止している。以前に配布している資料や、朝の申し送り、適宜管理者より伝えている。	/	/	/	事業所として、虐待や不適切なケアを発見した場合の明確なルールは設けていないものの、その場の状況に応じて、支援する職員の交代を行うなどの対応を行い、管理者に報告をしている。また、管理者は、当該職員へ直接確認をして話し合うとともに、必要に応じて、朝の申し送りを活用して職員への周知を行い、注意を促すようにしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	朝の申し送りで振り返りを行っている。必要に応じて個別に聞き取り確認をしている。	/	/	/	
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見逃ごされることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	勉強会は密を避けるため中止しているので、気になる時は、朝の申し送りで伝えたり、各ユニットリーダーへ確認したり、している。	/	/	/	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	注意を払い点検している結果として、職員が離職する事があるが、不適切な対応は注意している。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	身体拘束を行わない施設として、意識しながら仕事ができる環境が維持できている。	/	/	/	
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	朝の申し送りや勉強会、ユニット会で適宜話し合うようにしている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設長の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	◎	入居前から身体拘束の弊害について説明し納得の上で利用してもらい、必要性がある時に状況説明と対策を家族へ説明している。	/	/	/	

愛媛県グループホーム小松の里

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解している。	△	成年後見制度については、大まかに管理者から職員へ説明をしているが、理解が難しいとの声もある。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	○	管理者から家族へ対象となる制度の説明を行い、相談窓口の紹介や、詳しく説明できる社会福祉士を紹介している。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	地域包括支援センターや社会福祉士会、社会保険労務士と相談できる窓口を常につけている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	◎	マニュアルを作成して、周知している。事故が発生した時は、朝の申し送りで、状況説明を行い、次に同じことが起こらないように考えるようにしている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	応急対応や初期対応の訓練を消防避難訓練時に、自主訓練で行っている。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	△	ヒヤリハットが起こる前に、ユニット内での気づきノートを作成しているが、気づきノートの活用がいまいち出来ていない。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	ヒヤリハットが起こる前に、ユニット内での気づきノートを作成して、朝の会で共有している。月に1回のユニット会でも検討している。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	△	苦情対応マニュアルは作成していないが、相談内容を職員が把握して、改善に向けてユニット会で事例が上がれば検討している。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	内容を確認しながら、管理者が窓口となり、必要に応じて市役所への報告も行っている。会社の代表者や部長、総務部に報告して、会社としても方向性も確認している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	事例がないが、苦情があれば、納得が得られる前向きな話し合いを行うように心がけている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	玄関に苦情や相談に対する意見箱を設置している。意見箱に用紙が入ることがない。			○	日々の会話やかかわりの中で、職員は利用者からの意見や要望を聞き、対応をしている。日頃から、事業所では家族と気軽に話ができるよう関係構築に努め、電話連絡時や来訪時などに職員が声をかけて、意見や要望を聞く機会を設けている。また、日常的に、管理者は職員と話す機会があるほか、職員から遠慮なく話せる良好な関係が築かれ、相互により良い利用者支援を検討している。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	玄関に苦情や相談に対する意見箱を設置している。意見箱に用紙が入ることがない。	◎		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	要望や苦情があれば、国保連や市役所が窓口となっている事を契約時以外にも伝える体制はある。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	年に数回、代表者は管理者へ電話をして確認している。毎月1回の管理職会議で現状を代表者へ伝えている。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	△	ユニットリーダーが年に1回は面接を行っているが、管理者が社員の意見等を聞く機会がなく、間接的にしか聞けていないと思う。			○	

愛媛県グループホーム小松の里

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	自己評価はいつでも回覧できるようにして、全員で評価内容を確認している。				事業所では、外部評価の自己評価を全ての職員に確認して作成するとともに、サービスの評価結果をもとに、目標達成計画を作成して、達成等に向けて取り組んでいる。コロナ禍以前は、取り組みに関する意見をもらい、モニターの協力をしてもらうことができていたものの、現在の運営推進会議は書面開催で、参加メンバーが事業所に来訪する機会がないために機能しておらず、コロナ禍もあり、モニターの協力はできていない。コロナ禍の収束後には、モニター機能等を再開するとともに、出された意見をサービスの質の向上に反映されることを期待したい。	
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	△	サービス評価の項目に沿って、グループホームらしさに向かってサービスできるように話し合っている。					
		c	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	地域の方の評価があるので、参考に目標達成計画を作成する。					
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	×	運営推進会議が書面開催のため、また外部の面会も禁止しているため難しい。	○	△	△		
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	運営推進会議が書面開催のため、また外部の面会も禁止しているため難しい。					
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	火災、風水害を中心にマニュアルを作成して、玄関フローアに提示している。年に1回～2回は会社全体で、風水害の避難訓練と年2回はホームで火災総合訓練を実施。				以前に行った消防の立ち入り検査において、事業所では、新たに避難経路を増設した経緯がある。また、事業所では、年2回法定の消防避難訓練を実施するほか、土砂災害に見舞われた経験もあることから、年1回風水害を想定した避難訓練も実施している。さらに、地域に砂防ダムが設置されたことで、事業所の罹災リスクは軽減したため、近隣住民に災害発生時の避難場所として活用できる声かけをしている。コロナ禍において、地域と合同の避難訓練などは実施できていない。コロナ禍で事業所へ来訪する機会が少ないこともあり、利用者家族等アンケート結果から、事業所の防災対策を家族や地域住民に十分な理解が得られていないことがうかがえるため、コロナ禍の収束後には合同訓練を再開したり、広報紙を活用して訓練の様子を伝えたり、事業所内に訓練の様子の写真を貼り出すなど、安心してもらえるよう事業所の安全対策の周知などを職員間で検討することを期待したい。	
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	作成している計画書に沿って、避難訓練をしている。主に夜間中心となっている。安全のため利用者の参加は見学程度で、社員が中心となっている。					
		d	消火設備や避難経路、保管している非常食・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	業者が点検に入り、消火設備の点検を行っている。非常食はホーム管理者と総務部で管理している。					
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	年に2回の避難訓練計画書を提出時に消防署の職員と連携、警察官は知り合いと、地域の派出所の方が訪問に来てくれる時に管理者が連携している。	×	×	○		
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	×	コロナ対応で、大勢が集まる場所へ参加できていない。					
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	×	地域活動への参加が、コロナ対応で一切できていない。				以前に、事業所では夫からDVを受けた方の避難場所として活用されていたこともあり、近隣住民から身内や知人の高齢者相談などを受けた場合には、快く対応をしている。コロナ禍以前は、事業所では中学生の福祉体験の受け入れに協力するほか、職員が地域密着型サービスの研修の講師を務めるなど、関係機関との連携を密にして地域活動にも参加協力することができていた。コロナ禍において、活動が制限され、現在は協力はできていない。また、市行政や地域包括支援センター等が実施する会議や研修に参加する機会は減っているものの、連携を図ることができている。	
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	近所の方が相談に来られる事があり、対応している。入居相談の時に、他施設やサービスの情報も提供している。			△		△
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	×	コロナ対応で地域の集まりは出来ていないが、災害時に避難場所として開放する事を、地域の方に提案している。					
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	外部の方がホーム内に入れられないため、交流が出来ていない。					
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	×	コロナ対応で、大勢が集まる場所へ参加できていない。			○		

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I. その人らしい暮らしを支える

(1) ケアマネジメント

(2) 日々の支援

(3) 生活環境づくり

(4) 健康を維持するための支援

II. 家族との支え合い

III. 地域との支え合い

IV. より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 5 月 25 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 16名	(依頼数) 27名
地域アンケート回答数	6名	

※事業所記入

事業所番号	3890600145
事業所名	グループホーム小松の里
(ユニット名)	西通り
記入者(管理者)	
氏名	伊藤飛鳥(大森晋也)
自己評価作成日	令和 4 年 1 月 31 日

<p>【事業所理念】</p> <p>○入所者一人ひとりが自立した生活を営むことができるよう介護計画を作成し、身体面と心のケアを提供いたします。○一人ひとりが穏やかに、より生き生きと暮らせるよう環境を整え、安全で質の高いサービスが提供できるよう努めます。○主治医、協力病院と連携して、入居者が健康に生活できるよう援助します。○地域の人達と交流を図り、入居者の暮らしが地域社会に開かれたものとなるよう努めます。○市町村、地域の保健・医療・福祉サービスと連携して、総合的なサービスが提供できるよう努めます。</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】</p> <p>○入所前及び入所時のインテークを基本に、かわりがあった家族や近所の方などの会話する機会を増やし、入所前の生活やこだわりなど、情報を多くつかみ、生活している中でのこだわりを、生活歴と照らし合わせて、考える機会を増やす。 (対応)インフル流行の後にコロナ対応となったので、面会や外出泊が一切出来なかった。ケアプラン更新時に家族へ電話を行い、情報収集を行った。把握できる範囲で、こだわりを大切にできた。 ○グループホームでのこだわりや、ケアプランの目標が掲げられた根拠を、会議等に参加できていない職員が、理解及び把握することで、根拠に基づいたサービス提供や方向性の統一を再認識することができるようになる。 (対応)コロナ対策で、全員を集めての会議が開催できなかったため、朝の申し送りで細かく根拠を伝え、リーダーより発信する事で理解や把握に努める事ができた。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】</p> <p>開設から13年目を迎える事業所は、自然豊かな場所に立地している。母体法人は、市内を中心に医療法人や社会福祉法人を有するグループ企業で、地域において、「医療・福祉・介護」の三位一体のサービスを提供することができている。また、事業所では職員の退職が続き、落ち着かない時期があったものの、現在は職員が一丸となり、日々質の高いサービス提供を目指して取り組んでいる。さらに、老人保健施設で15年の介護経験がある管理者は、「ここでは利用者が自分の家のように自由に過ごし、当たり前のことを当たり前にできる暮らしを提供したい。認知症があっても、その時々思いをくみ取り、ここで良かったと思ってもらえる施設にしたい」と考えるなど、地域密着型サービスにこだわりながら、地域に根差した事業所を目指している。</p>
--	--	--

評価結果表

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	入所前の面接時、入所直後の会話、毎日の会話で把握に努めている。ケアプラン更新時にも聞き取りしている。	○		◎	事業所には、利用者自身が望んで入居に繋がるケースは少ないものの、入居前に、職員が面接時調査票等を活用して、主に家族から思いや暮らし方の希望などの聞き取りをしている。また、入居前に利用者から思いや意向等を聞くことができないケースもあるため、入居後に、職員は利用者の様子を観察するとともに、生活に馴染み出してから声をかけて、話を聞くようにしている。さらに、日々の会話や表情から、職員は根気強く利用者の希望や意向の把握に努めるとともに、独自のアセスメントシートに詳細な情報を記載して、職員間で情報を共有している。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	生活歴を家族より聞き、会話の中から表情や返答内容で、思いを感じ取るようにしている。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	コロナで面会が全く行えずだが、手紙を送ってくれる家族が増えて思いを考え、ケアプラン更新時や電話するタイミングで家族と話し合う事が出来ていた。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	月1回のユニット会で暮らし方への思いを話し、ケアプランの本人意向に記載している。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	いろいろな職員の意見を聞きながら、決めつけないように把握している。定期的に担当職員を交代して気づきを増やしている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	△	入所前の面接時、入所直後の会話、毎日の会話で把握に努めている。電話の都度、施設での出来事を伝えて、家族から聞き取りを行っている。			◎	入居時に、職員は利用者や家族、関係機関の担当者などから、様々な情報を得よう努めているものの、管理者は、「情報収集が十分ではない」と感じており、前回の目標達成計画に挙げて、事業所では取り組んできた経緯がある。また、入居前に、利用者が既に家族と同居していないケースも多いほか、居宅介護支援事業所の介護支援専門員からも詳しい情報が得られない場合もあるため、可能な場合には、職員が事前に自宅に訪問して、生活環境などの確認を行い、少しでも馴染みの暮らし方やこだわりなどの現状把握に努めている。さらに、病院から入居に繋がる場合には、サマリーなどの提供は受けるものの、その他の情報収集は難しく、入居後に得られる情報の方が多い。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	アセスメントを使い、見直し把握している。出来る事を行ってもらい、過度に手伝わず、出来る事を見極める事に努めている。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	本人の発した言葉を書きとめるようにしている。その都度の記録も日動及び夜勤時間は細かく記載するようにしている。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	○	体調面や環境面、何の目的なのかなど、予測をしながら、考えるように努めている。特に薬の変更なども意識している。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	介護記録に気づきを記載して、把握している。いつもと様子が違う時は、申し送り共有している。				
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	△	生活歴や性格も参考に、検討している。			◎	介護計画の更新時に、職員は利用者や家族に意向を確認するほか、計画作成担当者を中心に、月1回開催するユニット会を活用して、職員間で話し合い、情報共有をしている。また、アセスメントシートの情報は、計画の更新に合わせて、新たな情報を追記しながら、本人の視点でより良いサービス提供などの検討をしている。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	できる能力を把握しながら、している事が毎日の生活で多くなるように検討している。電話で話したりの協力を頼んでいる。リモート面会も活用している。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	ケアプランのニーズへ記載する時に、困っている内容も記載している。また、申し送りノートにも記載して皆で共有している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	ケアプラン作成前に、本人の思いや意向を確認している。訴えられない利用者の表情や行動から予測している。				介護計画の作成に際して、コロナ禍もあり、事前に家族に電話等で状況報告をした上で、希望や意向の確認をしている。また、事前に、利用者から聞いた意向などの情報をもとにして、ユニット会の中で話し合い、計画作成担当者を中心に計画を作成している。さらに、その時々々の状況に応じた利用者や家族の意向の変化を記載するとともに、意向に沿ったサービス内容となっている計画を確認することができた。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	面会が全くできない状況で、家族へ電話する時に、今の生活の様子を伝え、家族からも意見をもらえるように努めている。	○			
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	△	馴染みの関係や、離床時の座席等、心地よいと思ってもらえる配慮をしている。昔の話などで記憶にも働きかけている。				
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	ケアプランに家族へ協力してもらう内容を提示している。				
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	短期目標を記載して、実施記録を記入し、ユニット会で話し合っている。				介護計画の内容は、ユニット会の中で話し合いをしていることもあり、職員間で情報共有することができている。個別のケアプランファイルには、短期目標とサービス内容が記載され、サービス内容ごとに、日々のサービスの実施状況を記録しやすくなっているほか、モニタリングにも活用している。また、家族に送付する手紙には、介護計画のサービスの実施状況や新たな計画の提案等を行い、利用者の状況が少しでも多く、分かりやすい工夫をしている。さらに、介護記録には利用者の発した言葉や行動などを簡潔に記録に残すほか、内容により、赤色などの記載する色を変えて、分かりやすくしている。記録は、タブレットを活用して入力できるようになり、夜勤職員等の負担軽減に繋がっている。加えて、職員の気づきや工夫、アイデア等は、申し送りノートに個別に記録されている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	◎	短期目標を記載して、実施記録を記入し、毎日の確認と1か月の状況確認をユニット会で話し合っている。				
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	◎	介護記録にも、普段と異なる会話や行動などを記載している。				
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	○	その日にできる出来ない事の変化に対応し何が出来るか探しカルテに記入している。				
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	介護計画の期間に見直しをしている。入退院などの後は、継続できるか暫定プランから始める時もある。				◎ 短期目標の設定期間に合わせて、概ね6か月に1回、介護計画の見直しをしている。また、入居時には1か月半で計画を見直すほか、退院時には1か月と状況に応じた期間で見直しをしている。さらに、新たな要望や変化が見られない場合にも、毎月実施するユニット会を活用して、利用者の現状確認を行っている。加えて、退院時などの状況に変化が見られた場合には、その都度関係者で話し合い、新たな計画を作成している。
		b	新たな要望や変化が見られない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	新たな要望や変化が見られない場合は、介護計画の期間に確認している。社員1人1人に確認している。申し送りノートも活用している。				
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	入院後の再入所時や、心身状態に変化がある時は、見直しをしている。暫定プランを作成するときがある。				
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	ユニット会を基本としているが、朝の申し送り時や、その後のユニットメンバーで適宜話している。緊急時は申し送りノートや気づきノートを使っている。				月1回ユニット会を実施するほか、毎朝8時45分から30分程度、管理者が参加した3ユニット全体の申し送りを実施している。また、問題事項や会社からの申し送り事項も、申し送りの場で情報を伝達している。また、事業所では会議や申し送りの内容は申し送りノートに記録を残すほか、参加できなかった職員は確認後にサインを行い、職員間で周知を図る仕組みづくりをしている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	発言する社員が限定されている時がある。限られた時間でその場にいるメンバーで意見交換。不在者には個別に伝達。				
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	○	コロナ対応で、全員が集まることを避けている。いつも一緒に仕事をしているメンバーとユニット会のみ開催している。				
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	○	会議録を閲覧して、申し送りノートも活用している。				
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	○	申し送りノートを毎日確認して、サインをしている。少し思い違いも生じている。				○ 毎朝、3ユニット合同で申し送りを実施している。また、職員間で情報伝達すべき内容は、すべて申し送りノートに記録するとともに、職員は出勤時等に確認して、サインを残している。さらに、重要事項や大事なことは、毎日申し送り等を活用して、繰り返し管理者等が口頭で伝え、確実な伝達に繋げている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	申し送りノートを毎日確認して、サインをしている。受診時は病院へ送付したFAX用紙に、受診した内容を記載して、皆で共有している。パソコンで受診記録を閲覧できるようにまとめている。	◎			

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと		
(2) 日々の支援											
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	その時にしたい事を、限られた職員数で、できるだけ叶えられる努力を日々行っている。全員に実施できない日もある。				おやつや飲み物、やりたいレクリエーション、着替えなど、全ての日常生活において、職員は利用者の意向を確認するほか、利用者自身で選んでいただくことを基本として、その時々気持ちに寄り添った支援に取り組んでいる。また、利用者確認することで不安が生じるなど、自己決定しにくい利用者には、職員から事前に把握した好きなことを勧めるなど、状況に応じた対応をしている。さらに、起床時間や就寝時間、入浴回数など、利用者の意向に沿った支援に努めている。加えて、手伝いをしてもらった後には、職員が「ありがとう」などの感謝の言葉を伝えたり、利用者が話をしたようなタイミングで見計らって話しかけたりするなど、利用者の活き活きた表情が引き出せるような雰囲気づくりも心がけている。		
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	入浴、排泄、更衣、食事場面で、選んでもらう機会を作っている。不安や混乱がある利用者へは、好まれるものを職員が勧めている。					○	
		c	利用者が思いや希望を表現するように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	○	不安が大きくなるように、できる限り意向を聞きながら、決めてもらっている。時間がかかる利用者が中心となり、支援できない時もある。						
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	本人の生活リズムを優先して、ゆっくりと生活できるよう支援している。基本的な時間は決めて、タイミングを図りながらペースを見て合わせている。						
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉かけや雰囲気づくりをしている。	○	職員が利用者の輪に入り、気の合う利用者と一緒に雰囲気づくりをしている。好む話題を振ったりしている。						○
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	スキミングを行い表情の変化を見ながら支援している。						
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	勉強会や朝の申し送り、接遇マニュアルを意識して、言葉かけや態度を意識している。焦ってしまい言葉がきつくなる時がある。申し送りで適宜意識している。		◎	○	職員は人権や尊厳等を学び、理解している。時には、申し送り時などに、多忙さなどから、不適切な言葉や配慮に欠ける言葉を発する職員が見られるため、その都度職員間で話し合いをしたり、管理者は率先して職員に意識した言動を行うように伝えたりするなど、繰り返し気づきや注意を促している。また、毎朝実施する申し送りで、職員は理念を唱和するなど、より質の高いサービス提供に努めている。さらに、居室へ出入りする際には、利用者が入室時にはノックや声かけをしてから入室できている。時には、洗濯物の収納などで入室する際に、利用者が不在の場合があり、事前の声かけができていない職員も見られるため、管理者等は、「十分に気をつけた対応をしたい」と考えている。		
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉かけや対応を行っている。	○	小松の里の心がけ「あたたく、さりげなく、気くばり目くばり」を意識しながら対応している。焦ってしまい言葉がきつくなる時がある。					○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	他者から見えないような配慮や、露出が少なくなる配慮をしながら介助している。見守りを行う際に、戸が開いたままとなっている時がある。						
		d	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	入室前にノックを行い、入っても良いか確認してから出入りしている。						○
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	入職時に会社と職員でプライバシー保護の書類を交わっていて漏洩しないよう厳守している。						
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けを求めたり教えをもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	○	介護を行う場面でも、手伝ってもらえたり声かけや、教えてもらう態度で接している。職員が少ない時に、手伝ってもらえず、職員が行ってしまう時もある。				職員は利用者の状況や関係性を理解するとともに、利用者同士が支え合い、心地良く過ごせるよう配慮などの考慮をしている。また、少シトラブルを起こしやすい利用者もおり、利用者同士がトラブルになりそうな場合には、職員が早期に入るなど、陰湿な雰囲気を和らげるような対応に努めている。さらに、リビングにあるカレンダーは、毎月利用者が協力して作成をしている。		
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	利用者同士が協働できる座席の配慮を行い、支えあう事を理解している。						
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わえる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらい場面をつくる等)。	○	その時の気持ちを考えながら、心地よく関係が良好になるように、支えあう関係ができるように、座席の配慮を行っている。利用者の方で他者の行動に不満が多い方が、否定したり怒ったりと、攻撃的になるため、狭い空間では難しいと感じる。社員が間に入り話題を変えるなどフォローしている。						○
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者には不安や支障を生じさせないようにしている。	○	トラブルの原因を考え、双方が安心できるように、声かけを行っている。どちらの発言も否定しないように努めている。						

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	△	入所前の面接で、関係を聞き取り、面会時に家族より、関係について情報を得ている。利用年数が長くなると、家族以外との関係が少なくなっている。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	入所前の面接や、居宅ケアマネからの情報提供を参考に、毎日の会話からも、想像しながら把握に努めている。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	利用が長くなった利用者は、施設内での馴染みの関係作りが出来ている。コロナ対応で直接触れ合うことが出来ないが、リモート面会や懇話会に対応している。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	×	入室を全て断っている。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない)(※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	○	外に出たい気持ちの時は、とりあえず戸外へ出るよう対応している。全く出ようとされない利用者は、社員が誘っている。暑さや寒さが厳しい時は、外に出る事を拒まれるため、非常口から外を眺めたり日の光を浴びてもらっている。	○	○	○	コロナ禍において、事業所では以前のような外出はできていないものの、事業所の裏には広々とした庭があり、日頃から利用者は自由に戸外に出ることができ、少しでも気分転換を図れるよう努めている。また、ユニット間の移動や利用者同士の交流支援もしている。さらに、外出できる機会は減っているものの、感染状況を見計らいながら、ドライブに出かけるほか、近隣の散歩などに出かけられるようになってきている。加えて、重度の利用者も中庭に出て、外気浴ができるよう支援している。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	コロナ対応で社員以外の外出支援は行っていない。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	○	中庭を中心に、外気浴を行っている。			○	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	×	コロナ対応で人が集まる場所へは一切外出できていない。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	感染予防で全体で集まる勉強会は中止している。申し送りで状況を聞きながら、認知症を理解できるように、検討をしている。				更衣や入浴、排泄、食事、移動などの生活場面において、職員は利用者には極力手を出さず、見守りや声かけを行うなどの待つ介護に努めている。また、利用者自身でできることや、できそうなこと、その過程における気づきなどをユニット会や申し送り等を活用して、職員間で話し合いをしている。さらに、長年勤務している職員と若手職員には、馴れ合いの考えなどに意識の差が見られるものの、管理者は職員への気づきを促しながら、より良いサービス提供に努めている。加えて、事業所では体操や脳トレなどを取り入れ、少しでも利用者の心身機能の維持が図れるよう取り組んでいる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	感染予防で全体で集まる勉強会は中止している。申し送りで状況を聞きながら、認知症を理解できるように、看護師や理学療法士のアドバイスを参考に検討をしている。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	出来る事や出来るようなことの気づきを、職員同士で話し合い、できるだけ、行ってもらうようにしている。	○		○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	◎	入所前の聞き取りも参考に、手先を使う事なども新たに行ってもらい、興味のあることや、積極的に行いたいことの把握に努めている。				洗濯物干しやたみ、食材の下ごしらえ、お盆拭きなど、利用者には決まった時間にできることを役割として担ってもらうほか、終了後には感謝の言葉を伝えて、利用者一人ひとりの張り合いにも繋げている。また、訪問調査時には、ぬり絵や脳トレ、お盆拭きなどを活き活きとした表情で行う利用者の様子を見ることができた。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	◎	できることを、役割として行ってもらう。食材の下ごしらえや家事仕事につながる事を、レベルに応じて行ってもらう。脳トレ(手作り文字合わせ絵合わせ等)も高評価の様子。	○	○	◎	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	×	コロナ対応で、ホーム周辺の散歩しかできないため、地域との交流がない。				

愛媛県グループホーム小松の里

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	◎	着たい服を着ていただき、着こんでしまう方や肌着を上に着てしまう方、重ね着をする方へ、さりげなく着替えてもらっている。				整容の乱れや汚れが見られた場合には、職員がさりげなく声かけを行い、人目のつかない場所に移動してサポートをしている。また、昼食時にはエプロンを使用することなく、食べこぼしのあった際に、さりげなくティッシュペーパーを使用して拭き取る様子を見ることができた。さらに、馴染みの美容師の訪問があり、一人ひとりの好みを把握して、髪型や毛染めなどの対応をもらい、喜ばれている。加えて、重度の利用者も、居室からリビングへ出る際には、家族が持参した好みの服に着替えることができています。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	○	近隣のパーマ屋に希望を伝えて、利用者が好まれる髪型になるよう支援している。持参されるお気に入りには使用してもらっている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	△	利用者に聞くこと不安や不穏になる場面が多く、社員が選んだ服を着てもらうことが主となっている。持ち込みされた馴染みの服から選んでいる。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	○	外出時は、利用者がよそ行きと感じている服を選んで、選んだ服に着替えてもらっている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にしたりさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	さりげなく綺麗に整えている。間違えていても、無理強いない対応をしている。		○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	○	近所の美容院が馴染みの関係となり、希望を聞きながら散髪してくれている。馴染みの店には外出禁止のため対応できていない。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	家族からも好みを聞き取り、本人の好まれる服など持ち込まれている。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	△	下ごしらえから、音、匂いなど、食べる前から感じられる生活臭と、見た目や味など大切にしていたが、社員不足で昼食は提供できなくなった。				事業所では職員の勤務体制により、昼食は外注のレトルト食品を活用して、食事を提供しているものの、朝食と夕食は、ユニット毎に職員が献立を立て、食材の下ごしらえやお盆拭きなど、利用者にてできることを手伝ってもらいながら、職員が調理をしている。コロナ禍や利用者の高齢化等もあり、食材選びや買い物は、職員が担当をしている。献立を作成する際には、アレルギーのある食材を排除するとともに、利用者の食べたいメニューを聞き、取り入れることができている。また、利用者の誕生日には、リクエスト食と手作りケーキを提供して、利用者に喜ばれている。食器類は事業所で用意しているものの、利用者に好みの物を選んでもらい、分かるように名字を記載して使用をしている。朝食と夕食の際には、職員は利用者と同じ食事を一緒に摂りながら、見守りやサポートをしている。昼食の際には、職員は利用者のサポートに専念し、職員は会社の補助を活用して注文した配食弁当などを、別々に食べている。さらに、リビングに面したオープンキッチンで調理しており、利用者は調理の音や匂いで、食事の雰囲気を感じることができている。加えて、献立のバランスや調理方法などを職員間で話し合うほか、利用者の病状などに応じて、必要な場合には、栄養士と連携を図ることができている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	朝と夕はユニットでメニューを考え、リクエストを聞きながら献立を作り、できる方には、食材の下ごしらえを行ってもらえる支援をしている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	△	調理の下ごしらえや、後片付けを出来る利用者へお願いしている。買い物、調理、盛り付けは混乱や不安が多く、利用者から文句も出るのでできない。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入所前の面接時にアレルギーや苦手なものを聞いている。生活が始まり、毎日の会話で聞き取りや、食べ残しを見て把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	○	昼食がレトルトになったため、今までより提供するメニューが大幅に少なくなっている。誕生日会を利用者の誕生日に合わせて行い、リクエスト食を提供している。朝夕のメニューに旬の食材を取り入れるように心がけている。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いどりや器の工夫等)	○	嚥下や咀嚼を確認して、彩りや見た目を意識して、食べやすさの配慮も意識しながら、綺麗に盛り付けている。ミキサー食の方にも、飲み込みやすい食事の時は、安全を確認して普通に出すこともある。ミキサー食も彩りを考えて盛り付けている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	利用者のこだわりを優先して、利用者を選んでもらっている。使っている様子も確認している。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなくやっている。	○	昼はメニューが違うが、一緒に食卓を囲みながら見守りや食事介助を行っている。夕食は同じものを一緒に食べている。			◎	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	調理のにおいや音を大切に、ユニット内で朝と夕は調理している。配膳後も、意欲が高まるように声かけを行っている。食べる時間もその時々で、利用者のペースで行っている。		○	○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べれる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	食事量や水分摂取量は、十分にとれるように気を付けている。食事やお茶で補えない時は、メイバランスゼリーやエンシュワリキッドも活用している。				
		k	食事量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	水分摂取の少ない方には、好みの飲み物やお茶の時間に限らず何回も出している。水分量が少ない日に、主治医へ相談して必要時は通院で点滴を行っている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的な話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	職員でバランスや調理方法を話し合い、ユニット単位でメニューを決めている。現在は栄養士の指示が必要な利用者はいない。必要時は栄養士と連携を図る。			◎	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	食中毒への予防や衛生管理は気を付けている。食事直前のテーブル消毒や手指消毒も毎回行っている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながる事を、研修や勉強会で学び理解している。				職員は口腔ケアの重要性を学んでいる。食後に、職員は利用者へ声をかけ、歯磨きなどの口腔ケアを実施している。また、自分で歯磨きができる利用者の口腔内の健康状況の十分な確認までには至っておらず、次の歯科受診までに不具合や口腔内の異常が発生していることもあるため、口腔ケアの重要性を再認識し、定期的に全ての利用者の口腔内の状況が把握できる工夫を期待したい。さらに、口腔ケアのサポートが難しい利用者や不穏な利用者もいることもあり、管理者は「口腔内の衛生管理は難しい」と感じている。加えて、異常が見られた場合には、歯科医の往診などに繋げている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	口腔ケア時に目視して、気になる時は、家族へも説明し同意のもとで、歯科受診や往診の依頼をしている。			△	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	歯科往診時に、個別に気を付けるポイントを教えてもらっている。他の利用者へも学んだ知識を参考に行っている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	無理強いないように、手入れを行っている。入れ歯洗浄剤も活用している。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	口腔ケア時に目視して、気になる時は、家族へも説明し同意のもとで、歯科受診や往診を依頼している。どうしても拒否され自力で歯磨きする利用者には難しい。スポンジブラシでふき取りをしている。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医を受診するなどの対応を行っている。	◎	口腔ケア時に目視して、気になる時は、家族へも説明し同意のもとで、歯科受診や往診を早期に依頼している。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	◎	勉強会でトイレでの排泄の重要性や、おむつ使用による精神的負担を把握し理解している。布パンツから紙パンツへの移行については、かなり慎重に行っている。経済的負担も配慮している。				事業所では、トイレでの排泄支援を基本としている。また、排泄用品の使用には経費がかさむため、可能な範囲で極力排泄用品の使用はしないように取り組み、職員は声かけやトイレ誘導を行い、布パンツで過ごすことのできている利用者もいる。さらに、利用者一人ひとりの状況に応じて、適切なパッドやおむつなどの排泄ケア用品を職員間で検討するとともに、家族にも説明の上で使用している。加えて、入院時に、おむつや紙パンツで過ごしている利用者も多く、退院時に職員は、パッドや布パンツの使用など、早期にもとの状態に戻せるように取り組んでいる。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	食事、水分量や、運動不足などの原因及び、便秘が周辺症状に影響することを理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	訴えられない利用者の行動をみながら、排泄したい気持ちを行動や表情から予測している。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	自己負担でおむつ使用する利用者は購入してもらうため、その時々で注文の種類を検討している。業者もコストが高くない所を紹介している。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	普段の生活場面を見直し、主治医とも相談して、改善できる点を模索している。センナのお茶を煎じて、調整もしている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	利用者の動きや訴えに応じて、行きたい気持ちを予測してトイレの案内をしている。無理強いほしないように気を付けている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一時的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	自己負担でおむつ使用する利用者は購入してもらうため、その時々で注文の種類を検討している。朝と夕のユニット内での申し送り、どの種類が良いか、変化がある時に検討している。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	○	家族にも状況を共有してもらい、適宜使い分けできるように選んでいる。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	くだものや、ヨーグルト、センナ茶など、できるだけ自然に出るように取り組んでいる。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	◎	毎日入れる状況を作り、入りたい気持ちになっているタイミングで入浴できるように支援している。回数も決めずに、誘い入れるようにきっかけを作っている。	◎		○	事業所では、毎日午後から入浴できるように準備しており、利用者の希望に応じて、毎日の入浴支援も可能としている。また、夕食前後の時間帯に、入浴する利用者もいる。さらに、入浴を拒む利用者もおり、目標は2日に1回の入浴ではあるものの、週2〜3回を目指して、職員は声かけや誘導を試みている。加えて、湯の温度や浴槽に浸かる時間は、利用者一人ひとりの好みに対応している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	◎	1人ずつ入浴できるように、ゆっくり利用者のペースで入浴してもらっている。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	できている事は手伝わないで見守りや声かけで入浴してもらっている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いないで気持ちよく入浴できるよう工夫している。	○	家族からも自宅での習慣を聞きながら、入りたい気持ちになるよう支援している。誘い方も工夫して、浴室までの案内を行っている。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴介助の手順書を参考に、健康状態の把握をしている。いつもと血圧や脈拍が違い不安な時は、主治医に相談して指示を受けている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	自宅での様子や入院中の様子を本人及び家族へ聞き取り、ホーム内での眠れる時間を把握している。	/	/	/	事業所では、安易に薬に頼らない支援に取り組んでいる。入居前から内服していた眠剤などの薬を止めることは難しいものの、利用者が眠れない場合には、職員と一緒にフロアで過ごし、居室でテレビを見たりするなど、無理強いすることなく、一人ひとりの生活リズムを大切に、できる限り自由に過ごしてもらっている。また、不眠が続く利用者には、医師に相談を行うほか、日中の過ごし方の工夫を行うなど、安眠が得られるよう支援にも努めている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	昨夜の様子や日中の様子を確認しながら、気持ちよく眠れる工夫を検討している。空調や湿度も確認している。水分補給もやっている。	/	/	/	
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	睡眠導入剤や安定剤は極力使用しないで、生活リズムが整えるように、日中の過ごし方、体調、水分量などを検討し、往診で主治医に適宜相談している。	/	/	○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	夜間眠れないから寝させない対応は行わず、疲れ具合に応じて日中も休む時間を取り入れている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	◎	手紙の返事は文字ずつ声かけし書けるように支援している。年賀状は届いた方に利用者名で返事を送っている。電話も希望時には直ぐに行っている。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	電話番号を教えて自らかけている方もいる。自分でかけられない方は、希望があれば、職員が番号を押してコードレス電話で話してもらっている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	コードレスを使用して、部屋で電話できるようにしている。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	封は開けずに、本人へ渡し、本人に開けてもらい、希望があれば、代読している。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	限られた利用者の家族から電話がかかっている。手紙も限られた家族より届いている。本人から電話をかけることは、家族も了解している。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	現在はお金を保持したい希望がなく持っている利用者がない。持っているだけでも本人の安心につながる利用者へは、管理してもらう。	/	/	/	
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	×	買い物に行きたい意向がない。勧めでも希望されない。	/	/	/	
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	買い物に行きたい意向がない。勧めでも希望されない。いつでも買い物に行ける事は会話の中で伝えている。	/	/	/	
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	所持することで、不安や混乱が強くなる場合は、家族と相談しながら、家族が管理するほうが、QOLが高まるか検討している。	/	/	/	
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	常に状況に応じて、本人及び家族と相談して決めている。	/	/	/	
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしておき、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	基本的には、預からないようにしていて、ホーム立替で引き落とし、領収書を家族へ送付している。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	職員人数と相談しながら、個別にできるだけ希望に添えるよう取り組んでいる。	◎	◎	遠方に住んでいる家族のほか、家族の都合がつかない場合には、職員が通院の同行支援をしている。また、事業所では、支払いの立て替えや自宅へ郵便物を取りに行くなど、利用者や家族の希望に沿った柔軟な対応を心がけている。	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと		
(3)生活環境づくり											
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	朝7時から夕方17時まで、施錠しないで、常に出入りできるようにしているが、コロナ対策で外部の方は玄関までとなっている。	◎	◎	◎	事業所には広々とした駐車スペースがあるほか、玄関前に手入れされた花壇に咲いている紫陽花が季節を感じさせてくれ、出入りしやすいような雰囲気を感じられる。		
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。)	○	作り自体が、利用者のイメージしている大正や昭和の雰囲気ではないが、食事作りの音や匂い、生活臭が感じられる環境となっている。	○	○	○	事業所の玄関ホールには観葉植物や飾り付け、自動販売機などが置かれているほか、中に入ると広々とした中庭に面しており、風が通りもよく、開放感がある。リビングには、ぬり絵や習字などの利用者の作品が展示されているほか、小上がりの畳スペースもあり、落ち着きのある空間となっている。また、新聞やチラシでゴミ箱を折るほか、ぬり絵やレクリエーション活動が自由にできるように用具が置かれている。さらに、毎日職員が掃除を行うほか、空気清浄機も設置され、いやな臭いもなく、清潔が保たれている。加えて、建物周囲には自然が広がり、心地良い風が吹き抜けるとともに、中庭に出ると裏山の新緑が、利用者や来訪者に季節を感じさせてくれている。		
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	利用者にとって不快にならないように、配慮している。掃除も丁寧に行っている。					◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に取り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	食事作りの音や匂い、生活臭が感じられる環境となっている。観葉植物や思い入れのある人形や置物も飾っている。	○					○
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合う利用者同士で、安心できる座席があり配慮している。ソファを置いたり、玄関フロアや中庭も活用している。	○					
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	○	直接見えないように配慮している。	○					
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	入居時に家族と本人へ、馴染みの物を持ち込んでもらい、家族が持ち込めない時は、職員が付添い荷物を運んでいる。	◎		○	居室には、ベッドやエアコン、クローゼット、広い洗面台が備え付けられている。利用者は、テレビや衣装ケースを持ち込んでいるほか、たんずやすいなどの使い慣れた家具や家族の写真などに囲まれ、心地良く過ごせるよう工夫された居室も見られる。		
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	利用者が安全に使いやすいよう、手すりや車椅子専用トイレの手すり取替を行っている。				○		
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	全てを排除するのではなく、極力間違いにくい環境にしている。間違っても、さりげなく取り除くなど、自尊心を気づけないようにしている。						
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	○	活動意欲を触発するように、ほうきや、回転モップ、新聞や広告、趣味の品など置いている。怪我につながる裁縫道具やハサミなどは、依頼があれば、すぐに出せるようにしている。	○				トイレの間口は広く、表示のされていないユニットもあるものの、分かりやすい構造となっている。また、廊下やトイレには、利用者が使用しやすいように工夫された手すりが設置されているほか、利用者の状態に応じて、居室の表札などの表示のないユニットもある。さらに、状況に応じて、居室の入り口の名前の上に飾りをつけるなど、利用者が少しでも混乱しないよう分かりやすい工夫もしている。	
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)	○	鍵をかける事への弊害を職員全体で理解して、緊急性を除いては、常に施錠しないようにしている。17時以降は防犯対策で、自宅と同様に施錠している。屋外からの侵入を防ぐ目的。内側からは、玄関も開けられる鍵にしている。	◎	◎	◎	職員は、鍵をかけることの弊害を十分理解しており、日中に玄関等の施錠は行われていない。また、夜間は以前から玄関の施錠をしていたものの、現在は警察署からの指導で、17時から7時までの間、防犯対策のため施錠をしている。また、外に行きたい利用者には、職員が寄り添いながら、気が済むまで一緒に付き添う支援にも努めている。		
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	入居時に十分説明して、納得してもらい利用が始まっている。また、安全確保のため、職員が付添いしている状況を伝えて理解してもらっている。						
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)。	◎	玄関に感知センサーを設置して、東通り職員が毎回、玄関を見に来る事を徹底して行っている。利用者の行動を予測して、出たい気持ちの時は、職員が付添い出かけて、落ち着いてもらっている。	◎					

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	入居前の情報を共有して、アセスメントに病歴を記載し、把握に努めている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	身体状況の変化や異常のサインは、カルテや申し送りノートを活用して、早期に発見できるよう努めている。しかし、気づきに差が生じているため、常勤看護師に相談する事が習慣になりつつある。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	協力病院の西条市民病院へ連絡し常に担当看護師や医師に確認している。通院時にFAXした事も医師からの指示をカルテに閉じている。内科、外科以外の専門領域は、近くの病院を受診している。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	かかりつけ医の希望を聞いて、大半は協力病院の西条市民病院だが、専門医は併用して通院介助をしている。		◎		
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	本人及び家族の希望を優先して、かかりつけ医と連絡相談を行っている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	通院前に家族へ説明して、通院時に家族も立ち合える配慮をしている。通院介助は施設で行い、家族が立ち会えない時は、受診後に報告している。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	介護サマリーを入院当日に病院の担当看護師へ情報提供して、口頭でも配慮してほしい所を伝えていく。市民病院専用の情報提供書も作成している。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	入院中の洗濯物を施設が取りに行くことで、病院の関係者と話す機会が常にあり、情報交換を密に行っている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	日頃の連携はもろんの事、通院時には相談員や外来看護師と交流を図っている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	夜勤専属看護師や常勤看護師へ日頃の様子や、受診した結果など報告し、容態が気になる時は、様子を見てもらっている。看護師不在の時間は、かかりつけ医や外来看護師、休日など病院が休みの時でも、入院担当看護師に相談している。皮膚トラブルの様子は写メをラインで送り相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	協力病院は夜間でも相談できるように配慮されている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	朝昼夕に血圧、脈拍、熱を測定して、状況に応じて血中酸素濃度も測定しているので、変化には気づきやすい。気になるときは、外来看護師や主治医に相談している。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	医師から指示がでた処方内容が詳しく書かれた書類を保管して、薬剤師の説明を聞いている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	薬剤師が一包装した薬を指示通り飲んでもらえるように、薬袋の色分けや、本人確認、飲み込み確認を行っている。薬箱も活用している。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	普段の状態と違って来た場合に、常に副作用が影響していないか、追加された薬など影響がないか確認している。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	長年飲み続けている服薬も、状態の変化が気になる時は、必要性があるが医師と相談している。				

愛媛県グループホーム小松の里

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	重度化した場合に、適宜、本人に安全で快適に過ごせる場所を家族と一緒に考えている。急変時には、延命治療を希望するかなど、入居時に確認している。	/	/	/	事業所には、「重症化した場合の対応に係る指針」があり、重症化に伴う医療ニーズに応えるため、協力医療機関との連携体制などを家族に説明をしている。また、地域において、24時間体制で医療連携を確保することが難しいため、事業所として、看取り支援体制は取っていないものの、管理者等は、「できる限り住み慣れた環境で過ごしてもらいたい」と考え、関係者を交えて話し合い、利用者や家族の希望に応じて、ぎりぎりまで事業所で生活が送れるよう支援している。さらに、事業所で対応できなくなった場合には、家族と話し合いながら、病院や特別養護老人ホームなどに転院をしている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	医療行為の必要性など、グループホームで安全に提供できないと予測される段階で、主治医から説明をもらい、受け入れ先を家族と一緒に検討している。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	環境面や医師の協力(死亡時の訪問など)が整わない。現状では、看取りができない環境と判断している。	/	/	/	
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	◎	入所前の説明や、状態の変化に応じて、出来る事できない事を十分に説明して、理解してもらっている。	/	/	/	
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	重度化した場合に、適宜、本人に安全で快適に過ごせる場所を家族と一緒に考えている。グループホームで環境面での改善は考えていない。同じグループ内で支える事や、近隣の施設を提案している。	/	/	/	
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	最後まで責任を持って住み続けられるように、その時々で施設紹介などを説明している。	/	/	/	
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癩、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	感染症について、毎年勉強会を実施していたが、コロナ対応で全員が集まることを避けているため、今までの資料や時期になると、申し送り等で呼びかけを行い、早期発見、早期対応に努めている。	/	/	/	
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	勉強会で知識を学び、数年前にノロ疑い感染者があった時に、実践で経験して、他のユニットにも経験を共有している。西通りのESBL耐性の対応を実践で学んでいる。コロナ対応の感染対策も実施している。	/	/	/	
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	◎	愛媛県の情報を元に、往診時に主治医から聞くなど、情報を早く入手している。	/	/	/	
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	◎	保育所や小学校中学校の情報を、職員から得て、流行を把握している。	/	/	/	
		e	職員は手洗いやうがいなども徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	介助の後は手洗いを徹底している。自宅での検温後、入室前に検温、ユニット内での検温を実施。マスク着用も徹底している。面会は禁止している。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	月に1回の文書報告とケアプラン作成時に日常の様子を伝え、現状を把握してもらえるように伝え、一緒に支えてもらえるよう話をしている。	/	/	/	コロナ禍において、事業所では外部からの出入りが制限されており、家族が活動に参加できる状況となっていない。ガラス越しやオンラインの面会に対応するなど、事業所として、利用者が家族とかかわる機会を模索しているものの、高齢化や認知症状の進行に伴い、家族を認識しづらい利用者も増えてきている。また、家族には毎月利用者の様子を手紙で報告するとともに、2か月に1回広報紙を発行し、多くの写真を活用して分かりやすく行事や日常の様子を伝えている。さらに、事業所の運営上の事柄や出来事は、運営推進会議の中で報告しているものの、書面開催において報告は2家族のみに留まり、利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職等が十分に伝わっていないことがうかがえるため、広報紙を活用して出来事を報告したり、コロナ禍の収束後には、来訪時に家族に伝達したりするなど、全ての家族に理解が得られるよう職員間で検討することを期待したい。加えて、電話連絡時や来訪時を活用して、職員は利用者の様子を伝えるほか、家族の意見や希望などを気軽に言ってもらえるような声かけをしている。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	面会時は部屋でゆつりと他者を気にせずに、面会できるよう配慮している。家族の希望があれば宿泊してもらえる体制はあるが、コロナ対応ですべて禁止している。リモート面会と窓越し面会は実施している。	/	/	/	
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	○	ホーム内の活動に限られている。ホーム周辺の散歩は行っているが、コロナ対応で外出や外部参加の行事は行っていない。	○	/	△	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	日常の様子を毎月1回、日常生活・ケアプラン実施状況報告書で郵送して伝えている。介護計画作成時は、遠方の家族へ電話して意向を確認している。2か月に1度作成している広報紙も郵送している。	◎	/	○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的な内容を把握して報告を行っている。	○	電話で不安家族が知りたい事など、社員から説明している。不安が大きい時などは、相談員(ホーム長)から再度の電話をしている。	/	/	/	
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	入所後は、家族がしっかりと休息できて、気持ちに余裕が持てるよう支援している。在宅介護で大変と感じていた内容を聞き取り、ホームでの対応を伝え参考にしてもらっている。	/	/	/	
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	運営推進会議を書面開催で2か月に1回報告を行っている。運営上の事柄、職員の異動や入退職等を伝えている。	/	x	△	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	x	コロナ対応で働きかけは出来ていない。	/	/	/	
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	ホームの職員体制と環境の説明を行い、利用者個別に起こり得るリスクを説明し、対策も伝えている。	/	/	/	
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的にしている。	○	些細な事も報告して、面会時も気軽に話してもらえるように、職員から話しかけている。	/	/	○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	◎	入所時の説明を丁寧に行っている。事例なども伝えている。良い面や悪い面も伝えている。	/	/	/	
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	退所の時も経済面や環境面、その時々々の身体状況に応じて具体的な説明を行い、本人が安心できる所に住み替えるよう支援している。	/	/	/	
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	契約時や変更時に料金の内訳を文書で示し、丁寧に内訳を説明している。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	運営推進会議のメンバーや、地域の方から質問があれば、適宜説明している。	/	○	/	コロナ禍において、法人・事業所として、感染対策で外部との接触制限が設けられ、地域との交流できる機会は激減しており、現在は事業所周辺の散歩時のあいさつ程度に留まっている。また、事業所として、自治会へ加入していないものの、コロナ禍以前は、地域からの声かけて、ボランティアの来訪があったり、地域の行事やイベントに利用者と一緒に出向いたり、事業所で夕涼み会を開催するなど、地域と深く繋がることができていた。コロナ禍の収束後には、少しずつ地域との交流が再開できることを期待したい。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	△	ホーム周辺を散歩しながらあいさつをしている。しかし、あまり地域とのかかわりが無い。コロナ対応で人が集まる所への参加は避けている。	/	×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	△	顔見知りの地域の方が増えるように、あいさつを行っている。犬の散歩での顔なじみの方も増えている。	/	/	/	
		d	地域の方が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	○	運営推進会議をきっかけに、気軽に立ち寄れる関係を作っているが、現在はコロナ対応で立ち寄れない。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	○	運営推進会議をきっかけに、気軽に立ち寄れる関係を作っている。草引きをしながら、隣の畑の方と話したり、犬の散歩も効果的に感じる。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	△	散髪依頼を近所の、のりこ美容室に依頼している。コロナ対応でその他の広がりはずれていない。	/	/	/	
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	△	小松図書館より毎年、作品依頼があり、出展している。中学生との交流は現在中止している。先生とのやり取りは続けている。	/	/	/	
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	○	小松図書館、のりこ美容室、ウエス注文は小松の大磯タオルに注文など、理解を拡げる働きかけを行っている。	/	/	/	
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	△	書面開催で集まることは行っていない。	○	/	△	コロナ禍において、運営推進会議は書面開催となっている。コロナ禍以前の参加メンバーを対象に書類を送付しているものの、事業所として、市担当者など、今までのメンバーが継続できているかどうかの確認もできていないため、自宅や職場を訪問したり、電話連絡をしたり、書類の送付時に、アンケート等を同封して返信をもらうなど、コロナ禍においても、意見や連絡を取り合える体制が確保できることを期待したい。また、以前は、全ての家族へ会議案内を送付していたものの、一部の家族しか参加協力が得られなかったため、現在は固定された家族への案内や書類の送付に留まっている。さらに、送付書類において、利用者の様子やサービスの実際、評価への取組み状況を報告しているものの、一方通行の報告に留まっているため、参加メンバーからの意見や提案を日々の取り組みやサービス向上に活かしながら、会議の中で結果報告できるような工夫を職員間で検討することを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告している。	○	外部評価の後に、報告している。防災対策は度々テーマとして協力を仰いでいる。	/	/	○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	×	一方的に書類を送付するだけになっている。	/	◎	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	×	書面開催後に次回予定日を伝えている。	/	/	○	
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	○	外部評価の閲覧場所に、運営推進会議のファイルを置いていつでも見れるようにしている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	△	名札の裏に理念を入れて、いつでも確認しながら仕事ができるようにしている。仕事中は名札をしていないため確認することが少なく、理念を理解している社員は少ないと感じる。	/	/	/	
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	施設内に提示している。運営推進会議に参加されていた方には、理念を伝えていた。	○	◎	/	
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者:基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	管理者が代表して、代表者へ今の状況を伝え、必要な研修など受けられる配慮をしてくれている。コロナ対応で現在は外部への研修参加は中止している。	/	/	/	系列を含めて、法人組織が大きいため、代表者等の来訪はほとんどないものの、職員から出された意見は管理者がまとめて、代表者に伝えることのできる仕組みが整備されている。また、職員は、「何でも管理者に相談でき、働きやすいと感じている」ものの、管理者は、「人員不足で事業所の実情の理解と、協力してもらえていない」などと感じている。さらに、法人・事業所として、職員のキャリアアップや育成方針があり、外部研修の参加費用の助成制度はあるものの、コロナ禍において、外部研修の参加制限が設けられ、職員は参加することができず、現在は内部研修等に留まっている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	キャリア段位制度を参考にして、働きながらスキルアップできる取組を続けている。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	管理者が代表して、代表者へ今の状況を伝え、給料面や手当など、特に頑張っている職員へ配慮してもらっている。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	代表者は外部との交流や研修に費用を惜しまず、行きたい研修に参加できるように予算を入れてくれている。コロナ対応で外部への参加は中止している。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	×	ストレスを分散するのは難しい。そういった環境づくりはできていないと思う。	○	○	△	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	勉強会でみんなが集まる機会を中止している。以前に配布している資料や、朝の申し送り、適宜管理者より伝えている。	/	/	/	事業所として、虐待や不適切なケアを発見した場合の明確なルールは設けていないものの、その場の状況に応じて、支援する職員の交代を行うなどの対応を行い、管理者に報告をしている。また、管理者は、当該職員へ直接確認をして話し合うとともに、必要に応じて、朝の申し送りを活用して職員への周知を行い、注意を促すようにしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	○	朝の申し送りで振り返りを行っている。必要に応じて個別に聞き取り確認をしている。	/	/	/	
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見逃されることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	勉強会は密を避けるため中止しているので、気になる時は、朝の申し送りで伝えたり、各ユニットリーダーへ確認したり、している。	/	/	/	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	注意を払い点検している結果として、職員が離職する事があるが、不適切な対応は注意している。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	身体拘束を行わない施設として、意識しながら仕事ができる環境が維持できている。	/	/	/	
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	朝の申し送りや勉強会、ユニット会で適宜話し合うようにしている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設長の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	◎	入居前から身体拘束の弊害について説明し納得の上で利用してもらい、必要性がある時に状況説明と対策を家族へ説明している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを理解している。	△	成年後見制度については、大まかに管理者から職員へ説明をしているが、理解が難しいとの声もある。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	○	管理者から家族へ対象となる制度の説明を行い、相談窓口の紹介や、詳しく説明できる社会福祉士を紹介している。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	地域包括支援センターや社会福祉士会、社会保険労務士と相談できる窓口を常につけている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	◎	マニュアルを作成して、周知している。事故が発生した時は、朝の申し送りで、状況説明を行い、次に同じことが起こらないように考えるようにしている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	応急対応や初期対応の訓練を消防避難訓練時に、自主訓練で行っている。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	ヒヤリハットが起こる前に、ユニット内での気づきノートを作成している。再発防止は常に検討している。月に1回のユニット会(その日の勤務者)でも検討している。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	ヒヤリハットが起こる前に、ユニット内での気づきノートを作成して、朝の会で共有している。月に1回のユニット会(その日の勤務者)でも検討している。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	△	苦情対応マニュアルは作成していないが、相談内容を職員が把握して、改善に向けてユニット会で事例が上がれば検討している。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	内容を確認しながら、管理者が窓口となり、必要に応じて市役所への報告も行っている。会社の代表者や部長、総務部に報告して、会社としても方向性も確認している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	事例がないが、苦情があれば、納得が得られる前向きな話し合いを行うように心がけている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	玄関に苦情や相談に対する意見箱を設置している。意見箱に用紙が入ることがない。			○	日々の会話やかかわりの中で、職員は利用者からの意見や要望を聞き、対応をしている。日頃から、事業所では家族と気軽に話しかけるよう関係構築に努め、電話連絡時や来訪時などに職員が声をかけて、意見や要望を聞く機会を設けている。また、日常的に、管理者は職員と話す機会があるほか、職員から遠慮なく話せる良好な関係が築かれ、相互により良い利用者支援を検討している。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	玄関に苦情や相談に対する意見箱を設置している。意見箱に用紙が入ることがない。	◎		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	要望や苦情があれば、国保連や市役所が窓口となっている事を契約時以外にも伝える体制はある。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	年に数回、代表者は管理者へ電話をして確認している。毎月1回の管理職会議で現状を代表者へ伝えている。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	ユニットリーダーが年に1回は面接を行い、利用者本位の支援を確認している。勤務中に雑談することも参考になっている。				

愛媛県グループホーム小松の里

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	自己評価はいつでも回覧できるようにして、全員で評価内容を確認している。				事業所では、外部評価の自己評価を全ての職員に確認して作成するとともに、サービスの評価結果をもとに、目標達成計画を作成して、達成等に向けて取り組んでいる。コロナ禍以前は、取り組みに関する意見をもらい、モニターの協力をしてもらうことができていたものの、現在の運営推進会議は書面開催で、参加メンバーが事業所に来訪する機会がないために機能しておらず、コロナ禍もあり、モニターの協力はできていない。コロナ禍の収束後には、モニター機能等を再開するとともに、出された意見をサービスの質の向上に反映されることを期待したい。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	△	サービス評価の項目に沿って、グループホームらしさに向かってサービスできるように話し合っている。				
		c	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	地域の方の評価があるので、参考に目標達成計画を作成する。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	×	運営推進会議が書面開催のため、また外部の面会も禁止しているため難しい。	○	△	△	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	運営推進会議が書面開催のため、また外部の面会も禁止しているため難しい。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	火災、風水害を中心にマニュアルを作成して、玄関フローアに提示している。年に1回～2回は会社全体で、風水害の避難訓練と年2回はホームで火災総合訓練を実施。				以前に行った消防の立ち入り検査において、事業所では、新たに避難経路を増設した経緯がある。また、事業所では、年2回法定の消防避難訓練を実施するほか、土砂災害に見舞われた経験もあることから、年1回風水害を想定した避難訓練も実施している。さらに、地域に砂防ダムが設置されたことで、事業所の罹災リスクは軽減したため、近隣住民に災害発生時の避難場所として活用できる声かけをしている。コロナ禍において、地域と合同の避難訓練などは実施できていない。コロナ禍で事業所へ来訪する機会が少ないこともあり、利用者家族等アンケート結果から、事業所の防災対策を家族や地域住民に十分な理解が得られていないことがうかがえるため、コロナ禍の収束後には合同訓練を再開したり、広報紙を活用して訓練の様子を伝えたり、事業所内に訓練の様子の写真を貼り出すなど、安心してもらえるよう事業所の安全対策の周知などを職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	作成している計画書に沿って、避難訓練をしている。主に夜間中心となっている。安全のため利用者の参加は見学程度で、社員が中心となっている。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常食・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	業者が点検に入り、消火設備の点検を行っている。非常食はホーム管理者と総務部で管理している。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	年に2回の避難訓練計画書を提出時に消防署の職員と連携、警察官は知り合いと、地域の派出所の方が訪問に来てくれる時に管理者が連携している。	×	×	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	×	コロナ対応で、大勢が集まる場所へ参加できていない。				
		a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	×	地域活動への参加が、コロナ対応で一切できていない。				
51	地域のケア拠点としての機能	b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	近所の方が相談に来られる事があり、対応している。入居相談の時に、他施設やサービスの情報も提供している。		△	△	以前に、事業所では夫からDVを受けた方の避難場所として活用されていたこともあり、近隣住民から身内や知人の高齢者相談などを受けた場合には、快く対応をしている。コロナ禍以前は、事業所では中学生の福祉体験の受け入れに協力するほか、職員が地域密着型サービスの研修の講師を務めるなど、関係機関との連携を密にして地域活動にも参加協力することができていた。コロナ禍において、活動が制限され、現在は協力はできていない。また、市行政や地域包括支援センター等が実施する会議や研修に参加する機会は減っているものの、連携を図ることができている。
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	×	コロナ対応で地域の集まりは出来ていないが、災害時に避難場所として開放する事を、地域の方に提案している。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	外部の方がホーム内に入れられないため、交流が出来ていない。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	×	コロナ対応で、大勢が集まる場所へ参加できていない。			○	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 5 月 25 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 16名	(依頼数) 27名
地域アンケート回答数	6名	

※事業所記入

事業所番号	3890600145
事業所名 (ユニット名)	グループホーム小松の里 上通り
記入者(管理者) 氏名	玉井嘉奈子(大森晋也)
自己評価作成日	令和 4 年 1 月 31 日

<p>【事業所理念】</p> <p>○入所者一人ひとりが自立した生活を営むことができるよう介護計画を作成し、身体面と心のケアを提供いたします。○一人ひとりが穏やかに、より生き生きと暮らせるよう環境を整え、安全で質の高いサービスが提供できるよう努めます。○主治医、協力病院と連携して、入居者が健康に生活できるよう援助します。○地域の人達と交流を図り、入居者の暮らしが地域社会に開かれたものとなるよう努めます。○市町村、地域の保健・医療・福祉サービスと連携して、総合的なサービスが提供できるよう努めます。</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】</p> <p>○入所前及び入所時のインテークを基本に、かわりがあった家族や近所の方などの会話する機会を増やし、入所前の生活やこだわりなど、情報を多くつかみ、生活している中でのこだわりを、生活歴と照らし合わせて、考える機会を増やす。(対応)インフル流行の後にコロナ対応となったので、面会や外出泊が一切出来なかった。ケアプラン更新時に家族へ電話を行い、情報収集を行った。把握できる範囲で、こだわりを大切にできた。○グループホームでのこだわりや、ケアプランの目標が掲げられた根拠を、会議等に参加できていない職員が、理解及び把握することで、根拠に基づいたサービス提供や方向性の統一を再認識することができるようになる。(対応)コロナ対策で、全員を集めての会議が開催できなかったため、朝の申し送りで細かく根拠を伝え、リーダーより発信する事で理解や把握に努める事ができた。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】</p> <p>開設から13年目を迎える事業所は、自然豊かな場所に立地している。母体法人は、市内を中心に医療法人や社会福祉法人を有するグループ企業で、地域において、「医療・福祉・介護」の三位一体のサービスを提供することができている。また、事業所では職員の退職が続き、落ち着かない時期があったものの、現在は職員が一丸となり、日々質の高いサービス提供を目指して取り組んでいる。さらに、老人保健施設で15年の介護経験がある管理者は、「ここでは利用者が自分の家のように自由に過ごし、当たり前のことを当たり前にできる暮らしを提供したい。認知症があっても、その時々を思いをくみ取り、ここで良かったと思ってもらえる施設にしたい」と考えるなど、地域密着型サービスにこだわりながら、地域に根差した事業所を目指している。</p>
--	---	---

評価結果表

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	入所前の面接時情報、入所直後の会話、毎日の会話で把握に努めている。ケアプラン更新時にも聞き取りしている。	○		◎	事業所には、利用者自身が望んで入居に繋がるケースは少ないものの、入居前に、職員が面接時調査票等を活用して、主に家族から思いや暮らし方の希望などの聞き取りをしている。また、入居前に利用者から思いや意向等を聞くことができないケースもあるため、入居後に、職員は利用者の様子を観察するとともに、生活に馴染み出してから声をかけて、話を聞くようにしている。さらに、日々の会話や表情から、職員は根気強く利用者の希望や意向の把握に努めるとともに、独自のアセスメントシートに詳細な情報を記載して、職員間で情報を共有している。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	生活歴を家族より聞き、会話の中から表情や返答内容で、思いを感じ取るようにしている。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	コロナで面会が全く行えず、直接会って家族からの情報収集は出来なかった。ケアプラン更新時や電話するタイミングで家族と話し合う事が出来ていた。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	月1回のユニット会で暮らし方への思いを話し、ケアプランの本人意向に記載している。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	いろいろな職員の意見を聞きながら、決めつけないように把握している。定期的に担当職員を交代して気づきを増やしている。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入所前の面接時、入所直後の会話、毎日の会話で把握に努めている。電話の都度、施設での出来事を伝えて、家族から聞き取りを行っている。			◎	入居時に、職員は利用者や家族、関係機関の担当者などから、様々な情報を得よう努めているものの、管理者は、「情報収集が十分ではない」と感じており、前回の目標達成計画に挙げて、事業所では取り組んできた経緯がある。また、入居前に、利用者が既に家族と同居していないケースも多いほか、居宅介護支援事業所の介護支援専門員からも詳しい情報が得られない場合もあるため、可能な場合には、職員が事前に自宅に訪問して、生活環境などの確認を行い、少しでも馴染みの暮らし方やこだわりなどの現状把握に努めている。さらに、病院から入居に繋がる場合には、サマリーなどの提供は受けるものの、その他の情報収集は難しく、入居後に得られる情報の方が多い。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	アセスメントを使い、見直し把握している。出来る事を行ってもらい、過度に手伝わず、出来る事を見極める事に努めている。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	○	本人の発した言葉を書きとめるようにしている。その都度の記録も夜勤時間は細かく記載するようにしている。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	△	体調面や環境面、何の目的なのかなど、予測をしながら、考えるように努めている。把握に努めると共に社員間での共有が必要。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	○	介護記録に気づきを記載して、把握している。いつもと様子が違う時は、申し送り共有している。				
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	生活歴や性格も参考に、検討している。			◎	介護計画の更新時に、職員は利用者や家族に意向を確認するほか、計画作成担当者を中心に、月1回開催するユニット会を活用して、職員間で話し合い、情報共有をしている。また、アセスメントシートの情報は、計画の更新に合わせて、新たな情報を追記しながら、本人の視点でより良いサービス提供などの検討をしている。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	○	できる能力を把握しながら、している事が毎日の生活で多くなるように検討している。電話で話したりの協力を頼んでいる。リモート面会も活用している。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	○	ケアプランのニーズへ記載する時に、困っている内容も記載している。また、申し送りノートにも記載して皆で共有している。				

愛媛県グループホーム小松の里

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	ケアプラン作成前に、本人の思いや意向を確認している。訴えられない利用者の表情から予測している。	/	/	/	介護計画の作成に際して、コロナ禍もあり、事前に家族に電話等で状況報告をした上で、希望や意向の確認をしている。また、事前に、利用者から聞いた意向などの情報をもとにして、ユニット会の中で話し合い、計画作成担当者を中心に計画を作成している。さらに、その時々々の状況に応じた利用者や家族の意向の変化を記載するとともに、意向に沿ったサービス内容となっている計画を確認することができた。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	面会が全くできない状況で、家族へ電話する時に、今の生活の様子を伝え、家族からも意見をもらえるように努めている。	○	/	◎	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	馴染みの関係や、離床時の座席等、心地よいと思ってもらえる配慮をしている。昔の話などで記憶にも働きかけている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	ケアプランに家族へ協力してもらう内容を提示している。コロナで地域の人との協力は出来ない。	/	/	/	
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	短期目標を記載して、実施記録を記入し、ユニット会で話し合っている。できない所の記載だけでなく、できる事の発見も記載するようにしている。	/	/	/	◎
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	短期目標を記載して、実施記録を記入し、毎日の確認と1か月の状況確認をユニット会で話し合っている。	/	/	/	◎
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	◎	介護記録にも、普段と異なる会話や行動などを記載している。	/	/	/	◎
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	△	その日にできる出来ない事の変化に対応し何ができるか探しカルテに記入している。	/	/	/	○
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	○	介護計画の期間に見直しをしている。入退院などの後は、継続できるか暫定プランから始める時もある。	/	/	/	◎
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	新たな要望や変化が見られない場合は、介護計画の期間に確認している。ユニット会で毎月1回は確認している。	/	/	/	○
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	入院後の再入所時や、心身状態に変化がある時は、見直しをしている。暫定プランを作成するときがある。	/	/	/	○
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	ユニット会を基本としているが、朝の申し送り時や、その後のユニットメンバーで適宜話している。緊急時は申し送りノートを使っている。	/	/	/	○
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	△	発言する社員が限定されている時がある。限られた時間でのユニット会になっている。	/	/	/	月1回ユニット会を実施するほか、毎朝8時45分から30分程度、管理者が参加した3ユニット全体の申し送りを実施している。また、問題事項や会社からの申し送り事項も、申し送りの場で情報を伝達している。また、事業所では会議や申し送りの内容は申し送りノートに記録を残すほか、参加できなかった職員は確認後にサインを行い、職員間で周知を図る仕組みづくりをしている。
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	△	コロナ対応で、全員が集まることを避けている。いつも一緒に仕事をしているメンバーとユニット会のみ開催している。	/	/	/	○
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	○	会議録を回覧して、申し送りノートも活用している。	/	/	/	○
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	○	申し送りノートを毎日確認して、サインをしている。少し思い違いも生じているため、その場にいる社員には口頭でも伝えている。	/	/	/	○
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	申し送りノートを毎日確認して、サインをしている。受診時は病院へ送付したFAX用紙に、受診した内容を記載して、皆で共有している。パソコンで受診記録を閲覧できるようにまとめている。	◎	/	/	毎朝、3ユニット合同で申し送りを実施している。また、職員間で情報伝達すべき内容は、すべて申し送りノートに記録するとともに、職員は出勤時等に確認して、サインを残している。さらに、重要事項や大事なことは、毎日申し送り等を活用して、繰り返し管理者等が口頭で伝え、確実な伝達に繋げている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと			
(2) 日々の支援												
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	△	その時にしたい事を、限られた職員数で、できるだけ叶えられる努力を日々行っている。コロナでできない外出などの要望がある。				おやつや飲み物、やりたいレクリエーション、着替えなど、全ての日常生活において、職員は利用者の意向を確認するほか、利用者自身で選んでいただくことを基本として、その時々気持ちに寄り添った支援に取り組んでいる。また、利用者に確認することで不安が生じるなど、自己決定しにくい利用者には、職員から事前に把握した好きなことを勧めるなど、状況に応じた対応をしている。さらに、起床時間や就寝時間、入浴回数など、利用者の意向に沿った支援に努めている。加えて、手伝いをしてもらった後には、職員が「ありがとう」などの感謝の言葉を伝えたり、利用者が話をしたようなタイミングで見計らって話しかけたりするなど、利用者の活き活きた表情が引き出せるような雰囲気づくりも心がけている。			
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	入浴、排泄、更衣、食事場面で、選んでもらう機会を作っている。不安や混乱がある利用者へは、好まれるものを職員が動いている。					○		
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	△	不安が大きくなるように、できる限り意向を聞きながら、決めてもらっている。時間がかかる利用者が中心となり、支援できない時もある。							
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	本人の生活リズムを優先して、ゆっくりと生活できるよう支援している。基本的な時間は決めて、タイミングを図りながらペースを見て合わせている。							
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	職員が利用者の輪に入り、気の合う利用者テーブルを囲み雰囲気づくりをしている。						○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	スキミングを行い表情の変化を見ながら支援している。							
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	朝の申し送りや、接遇マニュアルを意識して、言葉かけや態度を意識している。焦ってしまい言葉がきつくなる時がある。申し送りでも適宜意識している。コロナ対策で3密回避のため勉強会は全体で行っていない。		◎	○	○	職員は人権や尊厳等を学び、理解している。時には、申し送り時などに、多忙さなどから、不適切な言葉や配慮に欠ける言葉を発する職員が見られるため、その都度職員間で話し合いをしたり、管理者は率先して職員に意識した言動を行うように伝えたりするなど、繰り返し気づきや注意を促している。また、毎朝実施する申し送りで、職員は理念を唱和するなど、より質の高いサービス提供に努めている。さらに、居室へ出入りする際には、利用者が入室時にはノックや声かけをしてから入室できている。時には、洗濯物の収納などで入室する際に、利用者が不在の場合があり、事前の声かけができていない職員も見られるため、管理者等は、「十分に気をつけた対応をしたい」と考えている。		
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	○	小松の里の心がけ「あたたく、さりげなく、気くばり目くばり」を意識しながら対応している。焦ってしまい言葉がきつくなる時がある。						○	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	△	他者から見えないような配慮や、露出が少なくなる配慮をしながら介助している。転倒の危険度に応じて見守りを行う際に、少し戸を開けて見守りを行っている。							
		d	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	入室前にノックを行い、入っても良いか確認してから出入りしている。							○
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	○	入職時に会社と職員でプライバシー保護の書類を交わっていて漏洩しないよう厳守している。							
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けを求めたり教えをもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	△	介護を行う場面でも、手伝ってもらう声かけや、教えてもらう態度で接している。職員が少ない時に、手伝ってもらわず、職員が行ってしまう時もある。					職員は利用者の状況や関係性を理解するとともに、利用者同士が支え合い、心地良く過ごせるよう配慮などの考慮をしている。また、少しトラブルを起こしやすい利用者もおり、利用者同士がトラブルになりそうな場合には、職員が早期に間に入るなど、陰湿な雰囲気を和らげるような対応に努めている。さらに、リビングにあるカレンダーは、毎月利用者が協力して作成をしている。		
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	利用者同士が協働できる座席の配慮を行い、支えあう事を理解している。							
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わえる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	△	その時の気持ちを考えながら、心地よく関係が良好になるように、支えあう関係ができるように、座席の配慮を行っている。利用者の方で他者の行動に不満が多い方が、否定したり怒ったりと、攻撃的になるため、狭い空間では難しいと感じる。						○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	○	トラブルの原因を考え、双方が安心できるように、声かけを行っている。どちらの発言も否定しないように努めている。							

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	△	入所前の面接で、関係を聞き取り、面会時に家族より、関係について情報を得ている。利用年数が長くなると、家族以外との関係が少なくなっている。				
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	入所前の面接や、居宅ケアマネからの情報提供を参考に、毎日の会話からも、想像しながら把握に努めている。				
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	利用が長くなった利用者は、施設内での馴染みの関係作りが出来ている。コロナ対応で、家族や友人とは、面会する事が出来なくなっている。数人はリモート面会に対応している。				
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	×	入室を全て断っている。				
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない)(※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	○	外に出たい気持ちの時は、とりあえず戸外へ出るように対応している。全く出ようとされない利用者は、社員が誘っている。利用者の気持ちに寄り添って、散歩や日光浴の声かけを行っている。	○	○	○	コロナ禍において、事業所では以前のような外出はできていないものの、事業所の裏には広々とした庭があり、日頃から利用者は自由に戸外に出ることができ、少しでも気分転換を図れるよう努めている。また、ユニット間の移動や利用者同士の交流支援もしている。さらに、外出できる機会は減っているものの、感染状況を見計らいながら、ドライブに出かけるほか、近隣の散歩などに出かけられるようになってきている。加えて、重度の利用者も中庭に出て、外気浴ができるよう支援している。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	コロナ対応で社員以外の外出支援は行っていない。				
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	○	中庭を中心に、外気浴を行っている。			○	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	×	コロナ対応で人が集まる場所へは一切外出できていない。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	△	感染予防で全体で集まる勉強会は中止している。申し送りで状況を聞きながら、認知症を理解できるように伝えるが、正しく認知症を理解し利用者の状態変化に応じた対応が必要と感じる。				更衣や入浴、排泄、食事、移動などの生活場面において、職員は利用者には極力手を出さず、見守りや声かけを行うなどの待つ介護に努めている。また、利用者自身でできることや、できそうなこと、その過程における気づきなどをユニット会や申し送り等を活用して、職員間で話し合いをしている。さらに、長年勤務している職員と若手職員には、馴れ合いの考えなどに意識の差が見られるものの、管理者は職員への気づきを促しながら、より良いサービス提供に努めている。加えて、事業所では体操や脳トレなどを取り入れ、少しでも利用者の心身機能の維持が図れるよう取り組んでいる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	△	感染予防で全体で集まる勉強会は中止している。申し送りで状況を聞きながら、認知症を理解できるように、看護師や理学療法士のアドバイスを参考に検討しているが、機能低下の特徴を1人1人が理解する必要がある。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	出来る事や出来るようなことの気づきを、職員同士で話し合い、できるだけ、行ってもらうようにしている。	○		○	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	◎	入所前の聞き取りも参考に、手先を使う事なども新たに行ってもらい、興味のあることや、積極的に行いたいことの把握に努めている。				洗濯物干しやたみ、食材の下ごしらえ、お盆拭きなど、利用者には決まった時間にできることを役割として担ってもらうほか、終了後には感謝の言葉を伝えて、利用者一人ひとりの張り合いにも繋げている。また、訪問調査時には、ぬり絵や脳トレ、お盆拭きなどを活き活きとした表情で行う利用者の様子を見ることができた。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	◎	できることを、役割として行ってもらう。食材の下ごしらえや家事仕事につながる事を、レベルに応じて行ってもらう。脳トレ(手作り文字合わせ絵合わせ等)も高評価の様子。	○	○	◎	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	×	コロナ対応で、ホーム周辺の散歩しかできないため、地域との交流がない。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	◎	一緒に服を見てもらい着たい服を着ていただき、着こんでしまう方や肌着を上に着てしまう方、重ね着をする方へ、さりげなく着替えてもらっている。				整容の乱れや汚れが見られた場合には、職員がさりげなく声かけを行い、人目のつかない場所に移動してサポートをしている。また、昼食時にはエプロンを使用することなく、食べこぼしのあった際に、さりげなくティッシュペーパーを使用して拭き取る様子を見ることができた。さらに、馴染みの美容師の訪問があり、一人ひとりの好みを把握して、髪型や毛染めなどの対応をしてもらい、喜ばれている。加えて、重度の利用者も、居室からリビングへ出る際には、家族が持参した好みの服に着替えることができています。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	△	近隣のパーマ屋に希望を伝えて、利用者が好まれる髪型になるよう支援している。パーマやカラーを希望されている方には支援できていない現実がある。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	△	利用者に聞くこと不安や不穏になる場面が多く、社員が選んだ服を着てもらうことが主となっている。持ち込みされた馴染みの服から選んでいる。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	△	コロナ感染予防で不要不急の外出や行事が行えていない。通院時の外出のみ服装を楽しんでもらっている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にしたりさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	さりげなく綺麗に整えている。間違えていても、無理強いしない対応をしている。		○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	○	近所の美容院が馴染みの関係となり、希望を聞きながら散髪してくれている。馴染みの店には外出禁止のため対応できていない。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	家族からも好みを聞き取り、本人の好まれる服など持ち込まれている。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	△	下ごしらえから、音、匂いなど、食べる前から感じられる生活臭と、見た目や味など大切にしていたが、社員不足で昼食は提供できなくなった。				事業所では職員の勤務体制により、昼食は外注のレトルト食品を活用して、食事を提供しているものの、朝食と夕食は、ユニット毎に職員が献立を立て、食材の下ごしらえやお盆拭きなど、利用者のできることを手伝ってもらいながら、職員が調理をしている。コロナ禍や利用者の高齢化等もあり、食材選びや買い物は、職員が担当をしている。献立を作成する際には、アレルギーのある食材を排除するとともに、利用者の食べたいメニューを聞き、取り入れることができています。また、利用者の誕生日には、リクエスト食と手作りケーキを提供して、利用者に喜ばれている。食器類は事業所で用意しているものの、利用者に好みの物を選んでもらい、分かるように名字を記載して使用をしている。朝食と夕食の際には、職員は利用者と同じ食事を一緒に摂りながら、見守りやサポートをしている。昼食の際には、職員は利用者のサポートに専念し、職員は会社の補助を活用して注文した配食弁当などを、別々に食べている。さらに、リビングに面したオープンキッチンで調理しており、利用者は調理の音や匂いで、食事の雰囲気を感じることができている。加えて、献立のバランスや調理方法などを職員間で話し合うほか、利用者の病状などに応じて、必要な場合には、栄養士と連携を図ることができている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	×	希望するメニューなど会話で聞くことがあるが、社員が中心となり行っている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	×	希望するメニューなど会話で聞くことがあるが、社員が中心となり行っている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入所前の面接時にアレルギーや苦手な物を聞いている。生活が始まり、毎日の会話で聞き取りや、食べ残しを見て把握している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔なつかしいもの等を取り入れている。	△	昼食がレトルトになったため、今までより提供するメニューが大幅に少なくなっている。誕生日会を利用者の誕生日に合わせて行い、リクエスト食を提供している。季節が感じられるメニューも取り入れている。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	嚥下や咀嚼を確認して、彩りや見た目を意識して、食べやすさの配慮も意識しながら、綺麗に盛り付けている。ミキサー食の方にも、飲み込みやすい食事の時は、安全を確認して普通に出すこともある。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	○	利用者のこだわりを優先して、利用者を選んでもらっている。使っている様子も確認している。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	昼はメニューが違うので一緒に食べないで食事介助をしながら見守っている。夕食は同じメニューで食卓を囲み食べている。ご飯と汁は作りたて炊きたてを提供していて、「このお米は美味しい」と言われる。食べこぼしサポートのさしげなく行っている。			◎	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	調理のにおいや音を大切に、ユニット内で朝と夕は調理している。配膳後も、意欲が高まるように声かけを行っている。食べる時間もその時々で、利用者のペースで行っている。		○	○	
		j	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	食分量や水分摂取量は、十分にとれるように気を付けている。食事やお茶で補えない時は、メイバランスゼリーやエンシュワリキッドも活用している。				
		k	食分量が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	水分摂取の少ない方には、好みの飲み物やお茶の時間に限らず何回も出している。水分量が少ない日に、主治医へ相談して必要時は通院で点滴を行っている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	○	職員でバランスや調理方法を話し合い、ユニット単位でメニューを決めている。現在は栄養士の指示が必要な利用者はいない。必要時は栄養士と連携を図る。			◎	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	食中毒への予防や衛生管理は気を付けている。食事直前のテーブル消毒や手指消毒も毎回行っている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながる事を、研修や勉強会で学び理解している。無理強いせず声かけをしっかりと行い口腔ケアを行っている。				職員は口腔ケアの重要性を学んでいる。食後に、職員は利用者へ声をかけ、歯磨きなどの口腔ケアを実施している。また、自分で歯磨きができる利用者の口腔内の健康状況の十分な確認までには至っておらず、次回の歯科受診までに不具合や口腔内の異常が発生していることもあるため、口腔ケアの重要性を再認識し、定期的に全ての利用者の口腔内の状況が把握できる工夫を期待したい。さらに、口腔ケアのサポートが難しい利用者や不穏な利用者もいることもあり、管理者は「口腔内の衛生管理は難しい」と感じている。加えて、異常が見られた場合には、歯科医の往診などに繋げている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	口腔ケア時に目視して、気になる時は、家族へも説明し同意のもとで、歯科受診や往診の依頼をしている。			△	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	歯科往診時に、個別に気を付けるポイントを教えてもらっている。他の利用者へも学んだ知識を参考にしていく。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	無理強いしないように、手入れを行っている。入れ歯洗浄剤も活用している。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	口腔ケア時に目視して、気になる時は、家族へも説明し同意のもとで、歯科受診や往診を依頼している。どうしても拒否され自力で歯磨きする利用者には難しい。			○	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医を受診するなどの対応を行っている。	◎	口腔ケア時に目視して、気になる時は、家族へも説明し同意のもとで、歯科受診や往診を早期に依頼している。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	△	排泄への理解が足りていないと感じる。もう少し勉強をしていく必要がある。布パンツから紙パンツへの移行については、かなり慎重に行っている。経済的負担も配慮している。				事業所では、トイレでの排泄支援を基本としている。また、排泄用品の使用には経費がかさむため、可能な範囲で極力排泄用品の使用はしないように取り組み、職員は声かけやトイレ誘導を行い、布パンツで過ごすことのできている利用者もいる。さらに、利用者一人ひとりの状況に応じて、適切なパッドやおむつなどの排泄ケア用品を職員間で検討するとともに、家族にも説明の上で使用している。加えて、入院時に、おむつや紙パンツで過ごしている利用者も多く、退院時に職員は、パッドや布パンツの使用など、早期にもとの状態に戻せるように取り組んでいる。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	食事、水分量や、運動不足などの原因及び、便秘が周辺症状に影響することを理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	訴えられない利用者の行動をみながら、排泄したい気持ちを行動や表情から予測している。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	自己負担でおむつ使用する利用者は購入してもらうため、その時々で注文の種類を検討している。業者もコストが高くない所を紹介している。パンツ、パットの必要性を適宜話し合い状況に応じて対応している。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	普段の生活場面を見直し、主治医とも相談して、改善できる点を模索している。センナのお茶を煎じて、調整もしている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	利用者の動きや訴えに応じて、行きたい気持ちを予測してトイレの案内をしている。無理強いしないように気を付けている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一時的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	自己負担でおむつ使用する利用者は購入してもらうため、その時々で注文の種類を検討している。朝と夕のユニット内での申し送り、どの種類が良いか、変化がある時に検討している。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	○	家族にも状況を共有してもらい、適宜使い分けできるように選んでいる。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	くだものやセンナ茶など、できるだけ自然に出るように取り組んでいる。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	△	限られた時間となっており、社員の都合で決めてしまう事が多くなっている。	◎		○	事業所では、毎日午後から入浴できるように準備しており、利用者の希望に応じて、毎日の入浴支援も可能としている。また、夕食前後の時間帯に、入浴する利用者もいる。さらに、入浴を拒む利用者もおり、目標は2日に1回の入浴ではあるものの、週2〜3回を目指して、職員は声かけや誘導を試みている。加えて、湯の温度や浴槽に浸かる時間は、利用者一人ひとりの好みに対応している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分に入浴できるよう支援している。	△	1人ずつ入浴できるように、ゆっくり利用者のペースで入浴してもらっている。浴槽へ入れない方にはシャワー浴のみで入浴が難しい。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	できている事は手伝わなくて見守りや声かけで入浴してもらっている。めんどいと言われる方には、時々多めに手伝って満足してもらっている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせずに気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	家族からも自宅での習慣を聞きながら、入りたい気持ちになるよう支援している。誘い方も工夫して、浴室までの案内を行っている。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴介助の手順書を参考に、健康状態の把握をしている。いつもと血圧や脈拍が違い不安な時は、主治医に相談して指示を受けている。看護師にも相談している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	自宅での様子や入院中の様子を本人及び家族へ聞き取り、ホーム内での眠れる時間を把握している。	/	/	/	事業所では、安易に薬に頼らない支援に取り組んでいる。入居前から内服していた眠剤などの薬を止めることは難しいものの、利用者が眠れない場合には、職員と一緒にフロアで過ごしたり、居室でテレビを見たりするなど、無理強いすることなく、一人ひとりの生活リズムを大切に、できる限り自由に過ごしてもらっている。また、不眠が続く利用者には、医師に相談を行うほか、日中の過ごし方の工夫を行うなど、安眠が得られるよう支援にも努めている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	昨夜の様子や日中の様子を確認しながら、気持ちよく眠れる工夫を検討している。空調や湿度も確認している。水分補給もやっている。	/	/	/	
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	睡眠導入剤や安定剤は極力使用しないで、生活リズムが整えるように、日中の過ごし方、体調、水分量などを検討し、往診で主治医に適宜相談している。	/	/	○	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	夜間眠れないから寝させない対応は行わず、疲れ具合に応じて日中も休む時間を取り入れている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	利用者からの要望に応じて、支援している。年賀状は届いた方に利用者名で返事を送っている。電話も希望時には直ぐに行っている。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	電話番号を教えて自らかけている方もいる。自分でかけられない方は、希望があれば、職員が番号を押してコードレス電話で話してもらっている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	コードレスを使用して、部屋で電話できるようにしている。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	封は開けずに、本人へ渡し、本人に開けてもらい、希望があれば、代読している。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	限られた利用者の家族から電話がかかっている。手紙も限られた家族より届いている。本人から電話をかけることは、家族も了解している。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大きさを理解している。	○	小銭を持っている方は数名いるが、持っているだけでも本人の安心につながっている。	/	/	/	
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	×	希望を伝えられる利用者が多くなったので、希望を聞いて買い物へ出かけられる機会を作りたい。コロナ終息から開始したい。	/	/	/	
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	希望を聞いて行きたいという思いがあるようであれば叶えたい。コロナ終息から開始したい。	/	/	/	
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	所持することで、不安や混乱が強くなる場合は、家族と相談しながら、家族が管理するほうが、QOLが高まるか検討している。	/	/	/	
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	常に状況に応じて、本人及び家族と相談して決めている。	/	/	/	
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしておき、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	基本的には、預からないようにしていて、ホーム立替で引き落とし、領収書を家族へ送付している。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	職員人数と相談しながら、個別にできるだけ希望に添えるよう取り組んでいる。	/	◎	◎	遠方に住んでいる家族のほか、家族の都合がつかない場合には、職員が通院の同行支援をしている。また、事業所では、支払いの立て替えや自宅へ郵便物を取りに行くなど、利用者や家族の希望に沿った柔軟な対応を心がけている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
(3)生活環境づくり										
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	朝7時から夕方17時までは、施錠しないで、常に入出入りできるようにしている。	◎	◎	◎	事業所には広々とした駐車スペースがあるほか、玄関前に手入れされた花壇に咲いている紫陽花が季節を感じさせてくれ、出入りしやすいような雰囲気を感じられる。	
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものを置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。)	○	建物自体が、利用者のイメージしている大正や昭和の雰囲気ではないが、食事作りの音や匂い、生活臭が感じられる環境となっている。季節にあった飾りつけをして、利用者に季節を感じてもらっている。	○	○	○	事業所の玄関ホールには観葉植物や飾り付け、自動販売機などが置かれているほか、中に入ると広々とした中庭に面しており、風が通りもよく、開放感がある。リビングには、ぬり絵や習字などの利用者の作品が展示されているほか、小上がりの畳スペースもあり、落ち着いた空間となっている。また、新聞やチラシでゴミ箱を折るほか、ぬり絵やレクリエーション活動が自由にできるように用具が置かれている。さらに、毎日職員が掃除を行うほか、空気清浄機も設置され、いやな臭いもなく、清潔が保たれている。加えて、建物周囲には自然が広がり、心地良い風が吹き抜けるとともに、中庭に出ると裏山の新緑が、利用者や来訪者に季節を感じさせてくれている。	
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	○	大きな音を立てないように気遣い、掃除丁寧に行っている。排泄後の匂いも消臭スプレーを活用している。	○	○	○		
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生生活空間の中に取り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	食事作りの音や匂い、生活臭が感じられる環境となっている。観葉植物や思い入れのある人形や置物も飾っている。	○	○	○		
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	気の合う利用者同士で、安心できる座席があり配慮している。ソファを置いたり、玄関フロアや中庭も活用している。	○	○	○		○
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	○	直接見えないように配慮している。	○	○	○		○
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	入居時に家族と本人へ、馴染みの物を持ち込んでもらい、家族が持ち込めない時は、職員が付添い荷物を運んでいる。	◎	○	○	居室には、ベッドやエアコン、クローゼット、広い洗面台が備え付けられている。利用者は、テレビや衣装ケースを持ち込んでいるほか、たんずやすいなどの使い慣れた家具や家族の写真などに囲まれ、心地良く過ごせるよう工夫された居室も見られる。	
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	利用者が安全に使いやすいよう、手すりや車椅子専用トイレの手すり取替を行っている。	○	○	○	トイレの間口は広く、表示のされていないユニットもあるものの、分かりやすい構造となっている。また、廊下やトイレには、利用者が使用しやすいように工夫された手すりが設置されているほか、利用者の状態に応じて、居室の表札などの表示のないユニットもある。さらに、状況に応じて、居室の入り口の名前の上に飾りをつけるなど、利用者が少しでも混乱しないよう分かりやすい工夫もしている。	
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	全てを排除するのではなく、極力間違いにくい環境にしている。間違っても、さりげなく取り除くなど、自尊心を気づけないようにしている。	○	○	○		
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	○	活動意欲を触発するように、ほうきや、回転モップ、新聞や広告、趣味の品など置いている。怪我につながる裁縫道具やハサミなどは、依頼があれば、すぐに出せるようにしている。	○	○	○		
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。(鍵をかけられ出られない状態でも暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)	○	鍵をかける事への弊害を職員全体で理解して、緊急性を除いては、常に施錠しないようにしている。17時以降は防犯対策で、自宅と同様に施錠している。屋外からの侵入を防ぐ目的。内側からは、玄関も開けられる鍵にしている。ユニット入口は施錠しない事が多いが、2階のユニットは階段からの転落防止目的で、オムツ交換時などリビングから離れる時間のみ入口施錠をする場合もある。	○	◎	◎	◎	職員は、鍵をかけることの弊害を十分理解しており、日中に玄関等の施錠は行われていない。また、夜間は以前から玄関の施錠をしていたものの、現在は警察署からの指導で、17時から7時までの間、防犯対策のため施錠をしている。また、外に行きたい利用者には、職員が寄り添いながら、気が済むまで一緒に付き添う支援にも努めている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	入居時に十分説明して、納得してもらい利用が始まっている。また、安全確保のため、職員が付添いしている状況を伝えて理解してもらっている。	◎	○	○		
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)。	◎	玄関に感知センサーを設置して、東通り職員が毎回、玄関を見に来る事を徹底して行っている。利用者の行動を予測して、出たい気持ちの時は、職員が付添い出かけて、落ち着いてもらっている。	◎	○	○		

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	入居前の情報を共有して、アセスメントに病歴を記載し、把握に努めている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	△	身体状況の変化や異常のサインは、カルテや申し送りノートを活用して、早期に発見できるよう努めている。しかし、気づきに差が生じている。口頭でも社員に伝えている。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	協力病院の西条市民病院へ連絡し常に担当看護師や医師に確認している。通院時にFAXした事も医師からの指示をカルテに閉じている。内科、外科以外の専門領域は、近くの病院を受診している。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	かかりつけ医の希望を聞いて、大半は協力病院の西条市民病院だが、専門医は併用して通院介助をしている。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	本人及び家族の希望を優先して、かかりつけ医と連絡相談を行っている。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	通院前に家族へ説明して、通院時に家族も立ち合える配慮をしている。通院介助は施設で行い、家族が立ち会えない時は、受診後に報告している。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	介護サマリーを入院当日に病院の担当看護師へ情報提供して、口頭でも配慮してほしい所を伝えていく。市民病院専用の情報提供書も作成している。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	入院中の洗濯物を施設が取りに行くことで、病院の関係者と話す機会が常にあり、情報交換を密に行っている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	○	日頃の連携はもちろんの事、通院時には相談員や外来看護師と交流を図っている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	夜勤専属看護師や常勤看護師へ日頃の様子や、受診した結果など報告し、容態が気になる時は、様子もみてもらっている。看護師不在の時間は、かかりつけ医や外来看護師、休日など病院が休みの時でも、入院担当看護師に相談している。皮膚トラブルの様子は写メをラインで送り相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	協力病院は夜間でも相談できるように配慮されている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	○	朝昼夕に血圧、脈拍、熱を測定して、状況に応じて血中酸素濃度も測定しているので、変化には気づきやすい。気になるときは、外来看護師や主治医に相談している。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	○	医師から指示がでた処方内容が詳しく書かれた書類を保管して、薬剤師の説明を聞いている。薬局へ電話して詳細を確認する時もある。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	薬剤師が一包装した薬を指示通り飲んでもらえるように、薬袋の色分けや、本人確認、飲み込み確認を行っている。薬箱も活用している。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	普段の状態と違って来た場合に、常に副作用が影響していないか、追加された薬など影響がないか確認している。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	○	長年飲み続けている服薬も、状態の変化が気になる時は、必要性があるが医師と相談している。				

愛媛県グループホーム小松の里

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	重度化した場合に、適宜、本人に安全で快適に過ごせる場所を家族と一緒に考えている。急変時には、延命治療を希望するかなど、入居時に確認している。	/	/	/	事業所には、「重症化した場合の対応に係る指針」があり、重症化に伴う医療ニーズに応えるため、協力医療機関との連携体制などを家族に説明をしている。また、地域において、24時間体制で医療連携を確保することが難しいため、事業所として、看取り支援体制は取っていないものの、管理者等は、「できる限り住み慣れた環境で過ごしてもらいたい」と考え、関係者を交えて話し合い、利用者や家族の希望に応じて、ぎりぎりまで事業所で生活が送れるよう支援している。さらに、事業所で対応できなくなった場合には、家族と話し合いながら、病院や特別養護老人ホームなどに転院をしている。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	医療行為の必要性など、グループホームで安全に提供できないと予測される段階で、主治医から説明をもらい、受け入れ先を家族と一緒に検討している。	○		○	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	環境面や医師の協力(死亡時の訪問など)が整わない。現状では、看取りができない環境と判断している。	/	/	/	
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	◎	入所前の説明や、状態の変化に応じて、出来る事できない事を十分に説明して、理解してもらっている。	/	/	/	
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	重度化した場合に、適宜、本人に安全で快適に過ごせる場所を家族と一緒に考えている。グループホームで環境面での改善は考えていない。同じグループ内で支える事や、近隣の施設を提案している。	/	/	/	
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	○	最後まで責任を持って住み続けられるように、その時々で施設紹介などを説明している。	/	/	/	
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癩、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	感染症について、毎年勉強会を実施していたが、コロナ対応で全員が集まることを避けているため、今までの資料や時期になると、申し送り等で呼びかけを行い、早期発見、早期対応に努めている。	/	/	/	
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	勉強会で知識を学び、数年前にノロ疑い感染者があった時に、実践で経験して、他のユニットにも経験を共有している。西通りのESBL耐性の対応を実践で学んでいる。コロナ対応の感染対策も実施している。	/	/	/	
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	◎	愛媛県の情報を元に、往診時に主治医から聞くなど、情報を早く入手している。	/	/	/	
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	◎	保育所や小学校中学校の情報を、職員から得て、流行を把握している。	/	/	/	
		e	職員は手洗いやうがいなども徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	介助の後は手洗いを徹底している。自宅での検温後、入室前に検温、ユニット内での検温を実施。マスク着用も徹底している。面会は禁止している。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと		
II. 家族との支え合い											
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	月に1回の文書報告とケアプラン作成時に日常の様子を伝え、現状を把握してもらえるように伝え、一緒に支えてもらえるよう話をしている。				コロナ禍において、事業所では外部からの出入りが制限されており、家族が活動に参加できる状況となっていない。ガラス越しやオンラインの面会に対応するなど、事業所として、利用者が家族とかかわる機会を模索しているものの、高齢化や認知症状の進行に伴い、家族を認識しづらい利用者も増えてきている。また、家族には毎月利用者の様子を手紙で報告するとともに、2か月に1回広報紙を発行し、多くの写真を活用して分かりやすく行事や日常の様子を伝えている。さらに、事業所の運営上の事柄や出来事は、運営推進会議の中で報告しているものの、書面開催において報告は2家族のみに留まり、利用者家族等アンケート結果から、職員の入退職等が十分に伝わっていないことがうかがえるため、広報紙を活用して出来事を報告したり、コロナ禍の収束後には、来訪時に家族に伝達したりするなど、全ての家族に理解が得られるよう職員間で検討することを期待したい。加えて、電話連絡時や来訪時を活用して、職員は利用者の様子を伝えるほか、家族の意見や希望などを気軽に言ってもらえるような声かけをしている。		
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	面会時は部屋でゆつりと他者を気にせずに、面会できるよう配慮している。家族の希望があれば宿泊してもらえる体制はあるが、コロナ対応ですべて禁止している。リモート面会は実施している。						
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	○	ホーム内の活動に限られている。ホーム周辺の散歩は行っているが、コロナ対応で外出や外部参加の行事は行っていない。			○		△	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	日常の様子を毎月1回、日常生活・ケアプラン実施状況報告書で郵送して伝えている。介護計画作成時は、遠方の家族へ電話して意向を確認している。2か月に1度作成している広報紙も郵送している。			◎		○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的な内容を把握して報告を行っている。	○	電話で不安家族が知りたい事など、社員から説明している。不安が大きい時などは、相談員(ホーム長)から再度の電話をしている。						
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	入所後は、家族がしっかりと休息できて、気持ちに余裕が持てるよう支援している。在宅介護で大変と感じていた内容を聞き取り、ホームでの対応を伝え参考にしてもらっている。						
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	運営推進会議を書面開催で2か月に1回報告を行っている。運営上の事柄、職員の異動や入退職等を伝えている。			x			△
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	x	コロナ対応で働きかけは出来ていない。						
		i	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	ホームの職員体制と環境の説明を行い、利用者個別に起こり得るリスクを説明し、対策も伝えている。						
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的にやっている。	○	些細な事も報告して、面会時も気軽に話してもらえるように、職員から話しかけている。					○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	◎	入所時の説明を丁寧に行っている。事例なども伝えている。良い面や悪い面も伝えている。						
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	退所の時も経済面や環境面、その時々々の身体状況に応じて具体的な説明を行い、本人が安心できる所に住み替えるよう支援している。						
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	契約時や変更時に料金の内訳を文書で示し、丁寧に内訳を説明している。						

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	運営推進会議のメンバーや、地域の方から質問があれば、適宜説明している。	/	○	/	コロナ禍において、法人・事業所として、感染対策で外部との接触制限が設けられ、地域との交流できる機会は激減しており、現在は事業所周辺の散歩時のあいさつ程度に留まっている。また、事業所として、自治会へ加入していないものの、コロナ禍以前は、地域からの声かけて、ボランティアの来訪があったり、地域の行事やイベントに利用者と一緒に出向いたり、事業所で夕涼み会を開催するなど、地域と深く繋がることができていた。コロナ禍の収束後には、少しずつ地域との交流が再開できることを期待したい。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	△	ホーム周辺を散歩しながらあいさつをしている。しかし、あまり地域とのかかわりが無い。コロナ対応で人が集まる所への参加は避けている。	/	×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	△	顔見知りの地域の方が増えるように、あいさつを行っている。犬の散歩での顔なじみの方も増えている。	/	/	/	
		d	地域の方が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	○	運営推進会議をきっかけに、気軽に立ち寄れる関係を作っているが、現在はコロナ対応で立ち寄れない。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	○	運営推進会議をきっかけに、気軽に立ち寄れる関係を作っている。草引きをしながら、隣の畑の方と話したり、犬の散歩も効果的に感じる。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	△	散髪依頼を近所の、のりこ美容室に依頼している。コロナ対応でその他の広がりはずれていない。	/	/	/	
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	△	小松図書館より毎年、作品依頼があり、出展している。中学生との交流は現在中止している。先生とのやり取りは続けている。	/	/	/	
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	○	小松図書館、のりこ美容室、ウエス注文は小松の大磯タオルに注文など、理解を拡げる働きかけを行っている。	/	/	/	
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	△	書面開催で集まることは行っていない。	○	/	△	コロナ禍において、運営推進会議は書面開催となっている。コロナ禍以前の参加メンバーを対象に書類を送付しているものの、事業所として、市担当者など、今までのメンバーが継続できているかどうかの確認もできていないため、自宅や職場を訪問したり、電話連絡をしたり、書類の送付時に、アンケート等を同封して返信をもらうなど、コロナ禍においても、意見や連絡を取り合える体制が確保できることを期待したい。また、以前は、全ての家族へ会議案内を送付していたものの、一部の家族しか参加協力が得られなかったため、現在は固定された家族への案内や書類の送付に留まっている。さらに、送付書類において、利用者の様子やサービスの実際、評価への取組み状況を報告しているものの、一方通行の報告に留まっているため、参加メンバーからの意見や提案を日々の取り組みやサービス向上に活かしながら、会議の中で結果報告できるような工夫を職員間で検討することを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告している。	○	外部評価の後に、報告している。防災対策は度々テーマとして協力を仰いでいる。	/	/	○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	×	一方的に書類を送付するだけになっている。	/	◎	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	×	書面開催後に次回予定日を伝えている。	/	/	○	
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	○	外部評価の閲覧場所に、運営推進会議のファイルを置いていつでも見れるようにしている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	△	名札の裏に理念を入れて、いつでも確認しながら仕事ができるようにしている。仕事中は名札をしていないため確認することが少なく、理念を理解している社員は少ないと感じる。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	施設内に提示している。運営推進会議に参加されていた方には、理念を伝えていた。	○	◎		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	△	コロナ感染予防で外部研修は、資格更新など切迫性があるもの以外はすべて中止だが、外部への研修参加は必要だと感じる。				系列を含めて、法人組織が大きいため、代表者等の来訪はほとんどないものの、職員から出された意見は管理者がまとめて、代表者に伝えることのできる仕組みが整備されている。また、職員は、「何でも管理者に相談でき、働きやすいと感じている」ものの、管理者は、「人員不足で事業所の実情の理解と、協力してもらえていない」などと感じている。さらに、法人・事業所として、職員のキャリアアップや育成方針があり、外部研修の参加費用の助成制度はあるものの、コロナ禍において、外部研修の参加制限が設けられ、職員は参加することができず、現在は内部研修等に留まっている。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	△	研修参加もできず現場の業務をこなすことで精一杯で学ぶ機会が持ていないため、スキルアップにつなげる事が難しい。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	管理者が代表して、代表者へ今の状況を伝え、給料面や手当など、特に頑張っている職員へ配慮してもらっている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	代表者は外部との交流や研修に費用を惜しまず、行きたい研修に参加できるように予算を入れてくれている。コロナ対応で外部への参加は中止している。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	×	ストレスを分散するのは難しい。そういった環境づくりはできていないと思う。		○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	勉強会でみんなが集まる機会を中止している。以前に配布している資料や、朝の申し送りで、適宜管理者より伝えている。				事業所として、虐待や不適切なケアを発見した場合の明確なルールは設けていないものの、その場の状況に応じて、支援する職員の交代を行うなどの対応を行い、管理者に報告をしている。また、管理者は、当該職員へ直接確認をして話し合うとともに、必要に応じて、朝の申し送りを活用して職員への周知を行い、注意を促すようにしている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	△	朝の申し送りで振り返りを行っている。必要に応じて個別に聞き取り確認をしているが、発言しにくい思い込んでいる職員が多い。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見逃されることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	勉強会は密を避けるため中止しているので、気になる時は、朝の申し送りで伝えたり、各ユニットリーダーへ確認したり、している。			○	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	△	現場の業務に追われすぎて、利用者へのケアが不十分であると感じる時がある。				
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	身体拘束を行わない施設として、意識しながら仕事ができる環境が維持できている。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	朝の申し送りや勉強会、ユニット会で適宜話し合うようにしている。				
		c	家族等から拘束や施設長の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	◎	入居前から身体拘束の弊害について説明し納得の上で利用してもらい、必要性がある時に状況説明と対策を家族へ説明している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを理解している。	△	成年後見制度については、大まかに管理者から職員へ説明をしているが、理解が難しいとの声もある。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	○	管理者から家族へ対象となる制度の説明を行い、相談窓口の紹介や、詳しく説明できる社会福祉士を紹介している。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	地域包括支援センターや社会福祉士会、社会保険労務士と相談できる窓口を常につけている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	◎	マニュアルを作成して、周知している。事故が発生した時は、朝の申し送り、状況説明を行い、次に同じことが起こらないように考えるようにしている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	△	応急対応や初期対応の訓練を消防避難訓練時に、自主訓練で行っているが、消防署立ち合いを中止しているため、できない社員も増えている。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	ヒヤリハットが起こる前に、ユニット内での気づきノートを作成している。再発防止は常に検討している。月に1回のユニット会でも検討している。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	ヒヤリハットが起こる前に、ユニット内での気づきノートを作成して、朝の会で共有している。月に1回のユニット会でも検討している。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	△	苦情対応マニュアルは作成していないが、相談内容を職員が把握して、改善に向けてユニット会で事例が上がれば検討している。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	内容を確認しながら、管理者が窓口となり、必要に応じて市役所への報告も行っている。会社の代表者や部長、総務部に報告して、会社としても方向性も確認している。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	事例がないが、苦情があれば、納得が得られる前向きな話し合いを行うように心がけている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	玄関に苦情や相談に対する意見箱を設置している。意見箱に用紙が入ることがない。			○	日々の会話やかかわりの中で、職員は利用者からの意見や要望を聞き、対応をしている。日頃から、事業所では家族と気軽に話しかけられるよう関係構築に努め、電話連絡時や来訪時などに職員が声をかけて、意見や要望を聞く機会を設けている。また、日常的に、管理者は職員と話す機会があるほか、職員から遠慮なく話せる良好な関係が築かれ、相互により良い利用者支援を検討している。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	玄関に苦情や相談に対する意見箱を設置している。意見箱に用紙が入ることがない。	◎		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	要望や苦情があれば、国保連や市役所が窓口となっている事を契約時以外にも伝える体制はある。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	年に数回、代表者は管理者へ電話をして確認している。毎月1回の管理職会議で現状を代表者へ伝えている。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	△	ユニットリーダーが年に1回は面接を行い、利用者本位の支援を確認している。勤務中に雑談することも参考になっているが、社員1人1人がもっと話しやすくなる雰囲気を作る必要があると思う。				

愛媛県グループホーム小松の里

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	自己評価はいつでも回覧できるようにして、全員で評価内容を確認している。				事業所では、外部評価の自己評価を全ての職員に確認して作成するとともに、サービスの評価結果をもとに、目標達成計画を作成して、達成等に向けて取り組んでいる。コロナ禍以前は、取り組みに関する意見をもらい、モニターの協力をしてもらうことができていたものの、現在の運営推進会議は書面開催で、参加メンバーが事業所に来訪する機会がないために機能しておらず、コロナ禍もあり、モニターの協力はできていない。コロナ禍の収束後には、モニター機能等を再開するとともに、出された意見をサービスの質の向上に反映されることを期待したい。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	△	サービス評価の項目に沿って、グループホームらしさに向かってサービスできるように話し合っている。				
		c	評価（自己・外部・家族・地域）の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	地域の方の評価があるので、参考に目標達成計画を作成する。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	×	運営推進会議が書面開催のため、また外部の面会も禁止しているため難しい。	○	△	△	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	×	運営推進会議が書面開催のため、また外部の面会も禁止しているため難しい。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。（火災、地震、津波、風水害、原子力災害等）	○	火災、風水害を中心にマニュアルを作成して、玄関フローアに提示している。年に1回～2回は会社全体で、風水害の避難訓練と年2回はホームで火災総合訓練を実施。				以前に行った消防の立ち入り検査において、事業所では、新たに避難経路を増設した経緯がある。また、事業所では、年2回法定の消防避難訓練を実施するほか、土砂災害に見舞われた経験もあることから、年1回風水害を想定した避難訓練も実施している。さらに、地域に砂防ダムが設置されたことで、事業所の罹災リスクは軽減したため、近隣住民に災害発生時の避難場所として活用できる声かけをしている。コロナ禍において、地域と合同の避難訓練などは実施できていない。コロナ禍で事業所へ来訪する機会が少ないこともあり、利用者家族等アンケート結果から、事業所の防災対策を家族や地域住民に十分な理解が得られていないことがうかがえるため、コロナ禍の収束後には合同訓練を再開したり、広報紙を活用して訓練の様子を伝えたり、事業所内に訓練の様子の写真を貼り出すなど、安心してもらえるよう事業所の安全対策の周知などを職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	作成している計画書に沿って、避難訓練をしている。主に夜間中心となっている。安全のため利用者の参加は見学程度で、社員が中心となっている。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常食・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	業者が点検に入り、消火設備の点検を行っている。非常食はホーム管理者と総務部で管理している。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	年に2回の避難訓練計画書を提出時に消防署の職員と連携、警察官は知り合いと、地域の派出所の方が訪問に来てくれる時に管理者が連携している。	×	×	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。（県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等）	×	コロナ対応で、大勢が集まる場所へ参加できていない。				
		a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。（広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等）	×	地域活動への参加が、コロナ対応で一切できていない。				
51	地域のケア拠点としての機能	b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	近所の方が相談に来られる事があり、対応している。入居相談の時に、他施設やサービスの情報も提供している。		△	△	以前に、事業所では夫からDVを受けた方の避難場所として活用されていたこともあり、近隣住民から身内や知人の高齢者相談などを受けた場合には、快く対応をしている。コロナ禍以前は、事業所では中学生の福祉体験の受け入れに協力するほか、職員が地域密着型サービスの研修の講師を務めるなど、関係機関との連携を密にして地域活動にも参加協力することができていた。コロナ禍において、活動が制限され、現在は協力はできていない。また、市行政や地域包括支援センター等が実施する会議や研修に参加する機会は減っているものの、連携を図ることができている。
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。（サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等）	×	コロナ対応で地域の集まりは出来ていないが、災害時に避難場所として開放する事を、地域の方に提案している。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	×	外部の方がホーム内に入れられないため、交流が出来ていない。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。（地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等）	×	コロナ対応で、大勢が集まる場所へ参加できていない。			○	